

**「大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」
P33～97より抜粋**

『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史』，
大妻女子大学人間生活文化研究所，
2019，
<https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63>
(参照 2020-06-09)

近藤四郎先生との思い出

菊田 文夫

聖路加国際大学大学院看護学研究科 准教授
元人間生活科学研究所 助手



大学院博士課程の満期を迎えていた私は、1988年4月に人間生活科学研究所第3部門（生理生態部門）の助手として2年間、大妻女子大学とのご縁をいただきました。当時、第3部門の教授は、京都大学霊長類研究所の所長を退官後、人間生活科学研究所の所長として着任された近藤四郎先生で、ダンディでフェミニストな香りを纏った学者という第一印象を受けました。初めての職場で緊張していた私に、「あなたとは、一人前の研究者としてお付き合いしますから、どうぞよろしく」とお声をかけていただいたことを、とても光栄に、しかし一方では、とても重い言葉として受け止めた記憶があります。

近藤先生は、足と靴の研究にとってもこだわりをもって取り組んでおられ、研究室には、永年にわたってご自身で収集された靴や下駄、草履の標本が、所狭しと収納されていました。他者に甘えることなく、自分自身の脳と身体を動かして、実験や観察、資料の収集に取り組もうとする、強い意志がなくては研究者失格だ。専門書や研究論文を読んで学ぶのは自宅で、大学では、寸暇を惜しんでデータ収集やデータ解析に取り組むこと。学生時代の恩師、時実利彦先生に鍛えられた近藤先生の研究者魂は、折に触れて私に叩き込まれました。

普段は、野村克也さんのような「ぼやき」にも似た、物事の核心をズバリと射貫く絶妙な語り口で、とても穏やかにお話しされる近藤先生でしたが、一度だけ、私に向かって激昂されたことがあります。これは、私が任されていたデータ解析の甘さが原因であったと、後になってわかりました。さらに、私に厳しい言葉を浴びせたことを周囲の人に溢すほど、相当気に病んでおられたことを研究員の皆さんから伝え聞くこととなり、近藤先生の研究に向かう厳しさ、後進を想う優しさを感じました。

当時の第3部門には、社会の第一線で活躍されている靴の匠が研究員として学んでおられ、新しい製品の開発に向けた地道な研究を積み重ねておられる後姿を拝見するにつけ、身の引き締まる思いがいたしました。その中のおひとり、いまは亡き、大塚製靴株式会社の大塚斌社長（当時）は、靴のヒール高と足部形状との関係について、並々ならぬ興味を抱いておられ、ヒールの高い靴を履いたときの足部形状を、どうにかして測れないものかと思案しておられました。現在は、レーザー光を用いた三次元計測器によって、簡単に、しかも正確な計測が可能ですが、当時はそのような機器は見当たらず、私たちの頭を悩ますことになったのです。そこで、近藤先生をはじめ、第3部門に属していた研究員総出で知恵を絞った結果、歯科用の型取り剤を使って足型を取る工夫を見い出し、この難問を見事に解決しました。私も研究チームの一員として、問題解決に微力ながら寄与できた、という達成感を味わう貴重な機会に恵まれました。

幼少期を長崎で過ごされた近藤先生は、郷土料理の「蒸寿司」と「茶碗蒸し」が大好きで、当時、信濃町にあった「吉宗」で、よくご馳走になりました。特に和食がお好きで、新橋や神田の鮎屋、神楽坂の割烹、築地の天婦羅の老舗にご一緒したことを覚えています。お出かけ前には、いつも決まって「美味しくない店だけど、行ってみますか」が口癖でしたが、どのお店のお料理も美味なものばかり。素直に感想を伝えると、「あなたは、味のわかる人だね」とお褒めの言葉をいただき、以後、私の車で都内各所を巡る美食の旅にご一緒することとなりました。

お世話になった大妻女子大学を退いた後、聖路加看護大学（現 聖路加国際大学）に職をいただくこととなってから、すでに四半世紀以上が経ちました。

現在は、「健康教育」「いのちの教育」「体験学習」「冒険教育」「幼児教育」「森のようちえん」をキーワードとする実践活動や研究活動に取り組んでいます。特に、自然体験活動を基軸とする保育「森のようちえん」が幼児の発育発達に及ぼす効果や、幼児のけがの発生機序に関する探索的研究に力を入れて取り組んでいます。これは、近年、「危ないと思うことは、すべて止めさせる」という安全至上主義のもと、幼児が遊ぶ環境を大人の視点からコントロールしてしまう、まるで「幼児が生きる環境のバリアフリー化」とも言える風潮に対して、強い苦言を呈したいと考えているからです。さらに、看護学部が担う高等教育については、「失敗を恐れず、挑戦し続ける生きかた」や「自身が生かされていることに感謝し、自らの社会的使命を果たすべく、人生を主体的に生きる姿勢」、そして「さまざまな価値観を否定せず、他者の過ちを赦せる平和な心」を備えた「専門性に立つ教養人」の育成に、自らの使命を感じています。

自分自身の脳と身体をフルに動かして、いま、目の前で繰り広げられている事象を注意深く観察し、そこから、新しい知見や問題解決への糸口を獲得する。いま、私が日々実践している生きかたの根底には、かつて近藤先生から学んだ「人間」と向き合う粹な姿勢が常に息づいている気がします。

生理生態学研究部門の思い出 一個に徹して普遍に至る

田中 秀幸

東京農工大学大学院工学研究院先端健康科学部門 教授
元人間生活科学研究所 助手



「あなたは本気で研究所に来る気があるのですか?」:「先生は本気で私を採る気があるのですか?」。近藤四郎先生(当時、人間生活科学研究所長・生理生態研究部門教授)とのおつきあいは、この初対面の会話から始まりました。私の近藤先生に対する態度は、良く言えば若さゆえの負けん気、常識からすれば世間知らずの傲慢でした。あのとき近藤先生に助手として採用していただいたおかげで、私は今こうして研究者としての人生を歩むことができているとつくづく思います。「ヒト」の研究の本当のおもしろさを教えて下さったのは、近藤先生であり、真家先生(当時、生理生態研究部門講師。後に家政学部教授)です。私が人間生活科学研究所に勤めたのは3年弱の短い期間でしたが、近藤先生・真家先生から学んだ知識と研究理念は、その後の私の研究人生において大きな礎となっています。

当時、所長付助手の私の仕事のひとつが、研究所内会議の議事録原案を作成することでした。私なりによく出来た議事録と思っていたも、近藤先生からは毎回のように入りました。「田中君は、文章が書けませんね」とよく言われたものです。文章が下手だと言わないところが、近藤先生流の絶妙な人心掌握術だったような気がします。あるとき、近藤先生の講義のお手伝いで私が大失態をしてしまったことがありました。近藤先生は大変激怒され、私に研究所を辞職するよう(かなり激しい口調で!)勧告されました。後日、辞職願を持参したところ、近藤先生はそれを一読され、「田中君は、辞職願さえもとに書けませんね」と穏やかな口調でおっしゃいました。この日以来、文章を書くときには何度も推敲するようになり、「近藤先生から修正が入らない完璧な文章を書く」、というのが私の目標になりました。「文章を大事にする」近藤先生の哲学は、

今でも守り続けています。

当時、近藤先生は、研究代表者として文部省科学研究費(特定研究:「変動する社会の家族にみられる文化と身体との相互作用」)の大規模研究プロジェクトチームを率いておられました。先生は、研究者は“研究費は自分で獲ってくる”という(現在では当たり前の)考えをお持ちでした。これに触発された私は、科研費奨励研究に応募しました。近藤先生・真家先生の校正のおかげで、初回のチャレンジで見事に採択されました。この科研費で購入したMacintosh IISEは私の愛機となり、私は今でもMac PCを愛用しています。

また、近藤先生は、大塚製靴(株)と共同研究を行っており、機能的で歩きやすい革靴の開発を目指しておられました。ウォーキングシューズが一般的でなかった時代です。見た目を重視する革製の伝統的な紳士靴や婦人靴のデザインに歩行機能性を加味するアイデアは、当時とても斬新だったと思います。ある日、近藤先生は真家先生と私に、足部の立体形状を測る方法を考えよと命じられました。靴設計のための足部計測は、解剖学的特徴点間の直線距離や周径を測るマルチン式の計測方法に頼っていた時代です。レーザー計測器などの三次元計測装置が安価でなかった時代、“かたち”を定量化することは非常に難しい問題でした。残念ながら、当時の私の知識と研究技術では、足部立体形状の計測法を確立できませんでした。代わりに真家先生と私は、アルキメデスの王冠の逸話に倣い、水槽に足を入れて溢れた水の体積(すなわち足の体積)を測ることにしました。その研究成果は、真家先生・田中秀幸・近藤四郎:足部の体積と直接計測項目との相関からみた靴設計の要件に関する研究(靴の医学、6、171-174、1992)として論文にまとめられています。

研究所に就職後しばらくして、真家先生と私はジャーナルクラブ（論文講読会）をやり始めました。講読する論文は、外国雑誌に掲載された英語論文に限るというルールがありました。学生時代、私が卒業論文や修士論文でレビューした先行研究は、そのほとんどが和文論文でした。英語論文をレビューする機会が少なかったため、英語論文に対する苦手意識が身に染みついてしまっていたと思います。このジャーナルクラブを機に私は、興味を持った研究テーマに関して、全て英語論文で読むことを決めました。東京農工大学に移ってから25年以上、この習慣を続けており、今では英語論文に対する苦手意識はすっかり無くなりました。

生理生態研究部門には様々な計測機器がありました。私が主に使用したのは、日本電気三栄社製の筋電計と共和電業社製のひずみ式床反力計でした。真家先生は、“装置を壊してもいいから計測器の使い方を独学せよ（使って覚えよ）”という考えをお持ちで、装置の詳しい使い方を教えて下さりませんでした。また、計測器の仕組み（電気回路など）や生理学的あるいは生体力学的な測定原理を独学することを私に課されました。当時は、これらの計測アンプからの信号波形は、インクや熱で紙に記録していました。実際、着靴歩行の床反力測定実験では、紙に出力された3分力（垂直分力、前後方向分力、左右方向分力）波形のピーク値（最大値や最小値）を求めるために、定規で基準線（0 [kgf] を示す線）を引き、基準線からピーク値までの鉛直距離を定規で測る方法で行っていました。複数実験参加者×複数の靴の種類×複数試行×3分力×左右脚……気の遠くなるような膨大な量の手作業を必要とします。アンプからの出力信号をAD変換してPCにデータを取り込み計算処理する方法の原理は理解していましたが、そのような装置やソフトウェアを揃えるには研究費が足りませんでした。そこで私が目をつけたのが、実験室に眠っていたグラフテック社のデジタイザーでした。デジタイザーは、DOS-PC（Windows 95が発売される前のOSで動くPC）とRS232C回線経由でハンドシェイクし、マウスのクリックでカーソルの座標情報を取り込むことができます。私はBASIC言語を独学し、3分力ピーク値をデジタイジングするプログラムを作りました。私が研究所時代に学んだこれらの研究技術は、高性能の計測機器が非常に安く手に入るようになった現在で

も、様々なところで私の研究活動に役立っています。

標題に書いた『個に徹して普遍に至る』—この言葉は、近藤先生の座右の銘だったそうです。研究所時代に真家先生から伝え聞いていましたが、私がこの言葉の真意を近藤先生から直接伺うことは叶いませんでした。「個としての研究者はその知識と洞察力を磨くことにより、観察対象者が一人（個）であっても、その個の振る舞いを徹底的に観察することを通して振る舞いの普遍性を理解することができる」というのが、今現在の私なりの解釈です。個に徹して普遍性を見いだした後は、客観化のために、それをデータで語らしめることです。個に徹して普遍に至ることができれば、実験や調査から得られる結果は事前に予測されるし、予測した通りのデータが得られるはずです。しかし現実には、なかなかそう上手くいきません。私には知識・洞察力・観察力がまだまだ足りないのだと思います。

近藤先生の座右の銘は、今では私の座右の銘でもあります。今の私の職場では、英語で論文を読み・書き・発表するのは当たり前のことで、教員は科研費などの外部資金を獲得し、Web of Scienceなどのデータベースに収録されている質の高い国際誌に論文発表すること、国際共著論文を書くことが求められています。私は、研究所時代に、十分な研究成果を挙げることはできませんでした。しかし、生理生態研究部門における研究生生活の経験があったからこそ、このようなハードルの高い目標でも、頑張っ

て達成しようという前向きな気持ちを保っています。最後になりますが、大妻女子大学附属研究所から「科学」の名が無くなったのは残念です。

人間生活科学研究所助手としての6年間

柿山 哲治

福岡大学スポーツ科学部 教授／元人間生活科学研究所 助手



私は筑波大学大学院修了後の1993年4月～1999年3月までの6年間、人間生活科学研究所生理生態研究部門（以下、第3部門）で助手としてお世話になりました。

私が助手のお話を頂いたのは、大学院修了を目前に控えた2月で、指導教員である松田光生教授から「大妻女子大学で助手を探している。男性が良いらしい。ただし、期限は1年。行く気はありますか？」と問われ、大学教員になることを夢見ていた私は願ってもないチャンスだと思い、一つ返事で「行きたいです。」と申し出ました。

お話を頂いて1週間足らずで大妻女子大学人間生活科学研究所を訪ね、当時第3部門の助手であった田中秀幸先生と講師であった真家生先生から、助手の仕事内容についてご説明頂き、研究所長の近藤四郎教授の研究室を訪ね、田中先生、真家先生、私の3名で研究所の設立経緯からこれまでの歴史を2時間程ご講義頂きました。そして、私の助手の任期を1年とした理由は、次年度第3部門教授に筑波大学の池上晴夫教授が就任される予定になっており、池上先生は教え子を助手として採用される予定であるとの説明を受けました。私自身はそのことに何の違和感も覚えず、とにかく池上先生が着任されるまでの1年間を、真家先生の研究の手伝いをしながら、しっかり過ごすことだけが社会人1年目の目標でした。

第3部門で行われる実験は主に筋電図を用いた研究で、大学院時代に循環器内科の先生について学んでいた私には、筋電図の測定や得られた結果の解釈が難しく、自ら筋電図を用いて新たな研究課題に取り組むことはできませんでした。しかしながら、研究所長事務取扱助手を兼任し、所員会議の議事録や予算書の作成、研究所年報の作成に携わりながら、事務作業を手際よくする能力は、自然と身に付いて

行ったように思います。

また、私と同時期に第3部門教授として着任された高石昌弘教授からは、1年間であっても私の研究業績が少しでも積めるようにと、自身の研究費を惜しみなく分け与えて頂き、高石先生が長年研究されてきた発育発達研究の作図等を手伝うと、必ず研究報告書等に私の名前を加えて頂きました。その間、第1部門の芦澤玖美教授、楠本彩乃助手・熊倉千代子助手、第2部門の大澤清二教授、笠井直美助手、第4部門の益本仁雄教授からもたくさんの教えを頂きました。

そして、次年度高石昌弘教授が人間生活科学研究所長に就任されるにあたり、新たに研究所長助手の採用をお認め頂き、池上教授就任後も私が在職できる枠を与えて頂いたのは、この上ない喜びでした。また、池上教授が着任された2年後以降も、池上教授が助手を新たに採用されなかったことから、第3部門の助手としても任期延長をして頂きました。

池上先生着任後の第3部門は、研究テーマが私の研究領域と類似していたことから、池上先生のご指導を仰ぎながら、週末のほとんどは筑波大学との共同研究で自身の研究業績を積み重ねることができました。池上先生からは、「今の君だったら、博士取得までに10年かかる。」と、研究に向かう姿勢や、思考力、英文を含めた先行研究の抄読力の未熟さを指摘され、指導を受ける度に厳しいご指摘を頂きました。しかしながら、池上先生は2年後には国際武道大学に異動されました。その後、私は筑波大学から1999年7月に学位を受けることができ、池上先生にお電話で「先生からは10年かかると言われた学位が6年で取得できました。」と報告した時には、「そんな事言った？」とご本人は覚えていらっしゃる様子でしたが、「おめでとう。これからもしっかりやりなさい」とお声を掛けて頂きました。

助手4年目には所員の先生方のご尽力のお陰で、当時4年期限であった助手の任期を6年まで延長できる制度に改正して頂きました。私自身は助手4年目に2年後に新設される大学へ専任講師で採用されることが決まっていたので、延長された2年間は研究や日常生活にも少し余裕を持ち、2年後に教壇に立つことをイメージしながら過ごすことができたように思います。また、研究所長助手には第2部門の大学院生であった武川素子さんが採用されたので、より研究に専念することができました。

私が在職中の第3部門以外の先生方は、海外に研究フィールドを持ち、長期休暇に入るとそれぞれのフィールドで研究活動を精力的に行われていました。中でも第2部門教授であった大澤先生から、朝のコーヒータイムに現地での話をお聴きする度に、自身も将来海外で研究できる機会が持てればいいなあと思い描いていました。

そして、大妻女子大学を退職して10年近く経ったころ、大澤先生から文部科学省の拠点システム構築事業「国際イニシアティブ」学校保健分野における教育協力の持続的な開発を目指す活動事業への参加をお誘い頂きました。私自身も2003年頃からインドネシアでの障害児体育の教育協力を経験していましたが、なかなか思い通りには行かず、大澤先生がお持ちのフィールド調査や国際教育協力に関するノウハウを、実践しながらご教示頂きました。また、このプロジェクトには同年代の他大学の先生方も多数参加され、その先生方との協働作業であったため、多くの刺激を受け、そこでの活動は大きな財産となりました。

また、大澤先生から中京大学体育学部で保健科教育法の担当できる教員を募集しているというお話を頂き、縁もゆかりもない私が、体育・スポーツの専門学部で働ける道筋を付けて頂きました。そこで、高石先生が監修された高等学校の保健体育の教科書を用いた授業をすることになるとは、夢にも思わず、改めて先生方の偉大さを痛感させられたとともに、もっと、教えを乞っておけばよかったと後悔しました。

私は現在、母校である福岡大学スポーツ科学部で保健体育科教育法を担当し、保健体育教員養成を行っています。また、定説では米国に留学していた大森兵蔵によって、明治41年に東京YMCAにバスケットボールが導入されたとされていますが、それ

より遡ること6年前の明治35年に撮影された長崎活水女学校の屋外体操場の古写真中に、バスケットゴールが立っていること発掘し、我が国のバスケットボールは、男子より女子で最初に導入されたという仮説を検証すべく研究を進めています。

大妻女子大学人間生活科学研究所から始まった私の大学教員生活も、現在四半世紀を過ぎました。大妻女子大学（6年）、九州保健福祉大学（5年）、活水女子大学（6年）、中京大学（4年）、福岡大学（5年目）と5つの大学で教鞭を執らせて頂きましたが、人間生活科学研究所の6年間で大学教員としての基盤を築かせて頂いたからこそ、今の自分が存在できるのだと思います。

創設110年の歴史ある大妻学院に奉職できたことを誇りに思い、残された大学教員生活を、初心を忘れることなく、後進の教育に邁進して行きたいと思っています。大妻学院の今後益々のご発展を九州の地よりお祈りしています。



1995年7月6日 人間生活科学研究所暑気払いの後で
於：神楽坂 毘沙門天 善國寺

大妻学院の創立110周年に寄せて

齋藤 実

専修大学経営学部 教授／元人間生活科学研究所 助手



大妻学院の創立110周年を心からお祝い申し上げますとともに、今後さらに大きく飛躍し、広く社会で活躍する人材が育成されることを心よりお祈り致します。また、歴史ある人間生活文化研究所の更なる発展を心より祈念しております。若輩の自分がその歴史に在籍をさせていただき、大妻学院ならびに人間生活文化研究所で賜ったご指導や経験は、人間生活科学研究所の助手の職を辞してから15年になる今になっても、自分自身の極めて重要な礎となっております。

入職した当時の研究所は、高石昌弘先生を所長とし、芦澤玖美先生、益本仁雄先生、そして現在所長を務めていらっしゃる大澤清二先生の4名の専任教授が核となって4部門を運営されていました。体育・スポーツ系の畑を歩んできた自分にとってはどの部門の研究も新鮮に映り、大変に刺激的な毎日を過ごさせていただきました。タイ、中国、ミャンマーなどの東南アジアから、昆虫、情報、体力、発育・発達、学校保健など、多種多様なキーワードが飛んでいました。また、同時期には下田敦子さん、熊倉千代子さん、平山素子さん、河原雅典さん、宇都宮由佳さんの6名の助手が在籍していましたが、大変優秀なスタッフが集まった組織に所属させていただいていたのだと振り返っています。

私が助手として務めさせていただいたのは、高石先生が担当されていた生理生態研究部門でした。生理生態研究部門は人間生理生態研究部門が前身であり、高石先生の前任は、京都大学霊長類研究所の初代所長を務められ、人の姿勢や歩行の研究をご専門にされている近藤四郎先生でした。そのため、都心に位置する大学の研究部門としてはかなり広かった研究室には、大型のフォースプレートが設置されており、歩行に関する測定機器類が多く並べられてい

ました。助手として赴任した際には、高石先生からこれらの機器類を使った研究もできればとのお話もあり、どうにか活かせないかとしばらく機器や専用ソフトウェアと格闘したことを覚えています。在籍3年目の時に、研究所が現在の大妻女子大学図書館棟6階に移転することになりました。その際に予算を用意していただき、フォースプレートは図書館棟地下に設置されることになりました。

務めさせていただいた頃を回顧していて印象的に思い出すのは、やはり高石先生とご一緒させていただいた場面でした。高石先生は研究所の所長に赴任される前は国立公衆衛生院長を務められておりましたが、ある日先生から国立公衆衛生院に行きましようとお誘いを受けました。国立公衆衛生院の建物および設備はアメリカ・ロックフェラー財団から日本政府への寄贈された歴史的建造物でしたが、組織の改組によって移転が決まり、残念ながら取り壊すことになってしまったため、高石先生が院に残してあったものを引き上げに行くとのことでした。私が通勤で使用していた軽自動車に、高石先生、大澤先生、平山さんが押し込まれるように乗り込み、現地に向かいました。歴史的建造物には、アンティークとも言っているオフィス家具類が残され、多くの書籍や書類が残されていました。そんな中、身体計測用の古い機器や測定器が出てきました。巻尺やモアレに記された備品番号を見てみると、昭和40年代のラベルが貼られています。また手回し式のタイガー計算器も出てきました。こちらは昭和30年代です。高石先生に何うと、「以前健康優良児という制度があって、それらを使って身体計測をしました。統計は手回し計算機でやっていましたよ。」とのこと。測定器を眺めながら、当時の研究や取り組みなどを、詳しくお聞かせいただくことができました。

子どもの頃、母親から健康優良児になれるようにと、食生活習慣と運動習慣の教育をされた記憶があったことから、そのことに高石先生が関わっておられたことに驚いたのと同時に、子どものころの我々が当時の公衆衛生学や学校保健学の研究に支えられていたことに気づかされました。この時、学校保健研究の社会的意義について、私の視野がやにわに広がった感覚を覚えました。いただいた測定器や手回し計算器はまだ手元に残っており、それを見る度に公衆衛生院でいただいた何よりのご指導を思い出しています。

研究所のスタッフでのティータイムやランチの際の情報交換の時間も思い出されます。部門間を超えて、研究のことはもちろん、時事の話題や先生方の深いご経験のお話、また私的なことのご相談もさせていただくことも多々ありました。研究所のスタッフで誘い合わせて、大学近所にランチに出ることもしばしばありました。初めて外にランチに出たのは、大澤先生からのお誘いで大学裏の中華料理店に行った時と記憶しています。大妻に勤める前は学食しか近所に食事をするところがないような田舎の大学に勤務していたため、このランチを新鮮に感じたことを覚えています。それからは、しばしばオススメのお店を紹介してもらいながら、ランチがてら大学近隣の環境を知るようになりました。研究所は千代田区三番町という文化的にたいへん恵まれた立地にあり、近所に出ることは様々な情報収拾に繋がりました。

研究所の助手として務めさせていただくだけでなく、私的ながら大学の剣道部にも関わらせていただいております。週数回の剣道部の稽古を指導していましたが、都心の大学は体育施設が手狭で、剣道部が稽古をする場所の確保が難しい状況でした。ある時、大学のすぐ横に九段小学校という歴史ある学校があることを知り、そこの体育館が千代田区民に開放されているとの情報を、その中華料理店で聞くことができました。当時の剣道部員は千代田区民ではなかったので通常は借りることはできないのですが、中華料理店のさらに隣の床屋でその話をしたところ、マスターとご家族一同が大妻発の地域剣道クラブのメンバーとして登録して下さり、九段小学校長と打ち合わせの上で施設を借りることができるようになりました。体育館を活用させていただいたおかげで、剣道部はそれまでに一度も成し遂げられなかった全日本学生大会への出場権を2年連続して獲

得することができました。更には、そのご縁が研究にも結びつくことになっていきます。

当時、フォースプレートを使用して平衡機能に関する研究を始めており、大学アスリートは一般学生よりも安静時の平衡機能が優れているという示唆を得ていました。その一方、子どもの発育・発達と運動習慣の関係について、高石先生、大澤先生存在から強い興味を抱いていました。そこで、高石先生、大澤先生にも御指南をいただきながら、小学生を対象として研究をさせていただくこととなり、その件を九段小学校に相談に行くことになりました。大学と隣接している小学校であること、また体育館をお借りしていたご縁があったことから、当時の校長先生とすぐにコンタクトを取ることができました。校長先生ご自身が、都心にある九段小学校が運動不足になりがちであろう小学生の発育・発達に一定の危機を感じていたことも相まって、大学との連携プログラムとして本研究をスムーズに受け入れてくれました。校長先生には小学校全体の授業の調整をいただき、教員の皆さまのご協力のもと全児童を測定することができました。

研究を実施することができた要因を振り返ると、研究所に関する様々なご縁が結びついた集大成の一つではなかったかと思わざるを得ません。生理生態研究部門の前歴からの姿勢と歩行の研究と、そのためのフォースプレート、研究所の先生方と楽しく情報収拾させていただいた大学周辺の環境とそこからのご縁、そして高石先生や大澤先生に強く影響を受けた学校保健学の視点の3つが揃い、実施につながったものと思います。

人間生活科学研究所の助手を4年務めさせていただいた後、国立スポーツ科学センター（JISS）の情報研究部の研究員として採用されました。そこでは、ジュニア期（小学生）のアスリートを対象としたタレント発掘プロジェクトのメンバーを任される機会がありました。その際に、参加した子どもの身体計測を行ったり、バランス機能の評価を実施することがあり、人間生活科学研究所の経験を活かすことができましたのもご縁であったと感謝するばかりです。

現在は、専修大学に勤めさせていただき、健康とスポーツ科学の授業を担当しています。今回、寄稿をさせていただく機会をいただき、改めて当時いただいたご指導や経験が、自分の現在に繋がっていることを実感しております。人間生活文化研究所となっ

た現在のWebサイトを拝見させていただくと、当時先生方で取り組まれていたことや、将来の展望としてお話を伺っていたことが着実に実現に至っており、畏怖の念を抱かざるを得ません。これからの人間生活文化研究所の発展を心より祈念しております。



2000年5月ころの写真

平井信義先生との思い出

井戸 ゆかり

東京都市大学人間科学部 教授



大学時代に平井先生の著書に出会い、吸い寄せられるように拝読しました。そして、平井先生の元で学びたいという気持ちが強くなり、大妻女子大学の大学院を受験いたしました。大学院入試の筆記試験の後、面接試験がありました。その時に、複数の先生からいろいろな質問を受けましたが、平井先生がやさしい笑みを浮かべて、「結果は期待していません」とおっしゃったことを今でも鮮明に覚えています。それが、平井先生と直接顔をあわせた初めての日でした。

平井先生は自主性を重んじていらっしゃるせいか、先生から「〇〇をなささい」といった課題を出されるということはありませんでした。大学院の授業は先生とマンツーマンの時もあり、90分の授業があつという間に過ぎてしまうほどさまざまな話で盛り上がる事が多く、とても有意義でした。児童学を学ぶにあたり、机上の学びだけでなく、実際に子どもと遊び接することや観察することの大切さを強く感じる授業でした。そして、研究においては、「オリジナリティ」と「ユリイカ」が大切だと常におっしゃっていました。

ある日、私はアメリカなどでの経験から日本人には特有の意識があるのではないかと考えることをはじめ、日本人の「気がね」の意識について関心があるとお話ししたところ、「それはおもしろい。研究してごらん」と言われました。その時に、平井先生から、『甘えの構造』（土居健郎著）と『菊と刀』（ルース・ベネディクト著）をまず読んでみるように助言されました。それらの著書からもヒントをいただき、「気がね」の意識について研究を始め、修士論文を書きました。「気がね」の英訳は幾つかありますが、欧米人を対象にインタビュー調査を行った結果、それらの英訳は日本人の「気がね」の意識

とは違う意味で使われていることがわかり、日本人の「気がね」の意識を理解できる人はなかなかいませんでした。それから、いつ頃から「気がね」の意識が生じるのかという疑問が生じ、毎週都内の幼稚園に通わせていただき、子どもの観察をさせていただきました。修士論文を書く中で、今でもよく頭に浮かぶのは、「格調高く」と先生が書かれた文字です。「論文はね、格調高く書くものなんだよ」とよくおっしゃっていました。「格調高く」という判子も作成されていて、学部の学生さんの卒業論文の指導などにもそれを押されていたようでした。また、「気がね」についての研究はそれまでではなく、日本で初めてということをおっしゃり、ラジオや著書の中で、「大学院の私の学生が日本で初めて気がねの意識について研究してしまてね…」としばしば紹介してくださっていました。

私は、修士課程修了後、博士課程に進学しました。当時は、「被服環境学専攻」という研究科の名称で、「気がね」の意識について被服心理学の観点を入れ研究しました。日米の女子大学生を対象に質問紙調査をしたり、在日外国人にインタビュー調査をしたり、実験をしたりと、調査における手続きが大変なことも多々ありました。とくに、アメリカの大学での質問紙調査の実施にあたっては、先方の大学において多くの委員会（倫理委員会など）を通さなければならず、かなりの時間を要しました。実施する上で調査協力者にストレスがかかることはないということを明記するようにという指示もありました。今でこそ日本でもインフォームド・コンセントは当然になっており、倫理上の手続きはきちんと遂行されていますが、当時は日本では倫理上の手続きはどちらかと言えば緩やかだったため、アメリカの大学での調査に関する倫理上の手続きの厳しさは平井先生

も驚いていらっしゃいました。

私事です。博士課程在学中に結婚し、一時体調を崩したこともあり、博士論文の提出を遅らせた方がよいのではという周囲の声もありました。先生方にはご心配をおかけしてしまいましたが、先生方や家族のあたたかい支えの中で平井先生の退官までに論文を書き上げたいという気持ちが強くあり努力しました。論文を書き終え、審査も終え、学術博士の学位授与が決まった時に、平井先生は「良かった、良かった」と、とても喜んでくださいました。恐らく、主査としてご自身の退官と同時期に教え子の学位授与を見届けることができ、ほっとされたのではないかと推察します。学位授与式に主人も来ていたのですが、先生は主人に向かって、「あなたに会いたかったんだよ」と言って主人の手をとり握手をし、私たちに先生の著書をたくさんくださいました。今でもそれは私たちにとって何にも代えがたい宝物であり、読み返すことが多くあります。

先日、写真を整理しておりましたら、平井先生の駒ヶ根の山荘に先輩や後輩と伺った時のものが出てきて、懐かしく思いました。そこは多くの木々に囲まれ、自然に恵まれており、「このフィトンチッドがいいんだよ」とよく話されていました。平井先生のお宅にも何度も伺いましたが、いつも奥様と仲睦まじくいらっしゃいました。子ども達も平井先生のことが大好きで、「ヒラメ先生」「ノビー（信義先生の名前から）」と言って、時々遊びに行かせていただいていた。

今、私は大学教員として、平井先生の教えを大切にしながら、保育者養成をしています。その他、保育所の巡回指導や、保護者の方や保育者・教員に向けてお話をさせていただく機会も多く、平井先生の教えが活きています。これからも、平井先生の教え子として、保育者養成や子育て支援等に注力していきたいと思います。教え子として平井先生の存在はとて大きく、先生が残された数々の功績の足元には及びませんが、自分なりにできることを一步一步進めていきたいと考えています。

最後に、私は大妻女子大学大学院に修士課程の2年間、博士課程の3年間、計5年間お世話になり、平井先生ばかりでなく、多くの素晴らしい教授陣に恵まれ、さまざまな視点から学びを得ることができましたことに心からお礼を申し上げたいと思います。自ら学ぶという多くの機会を与えていただいた

のも貴大学院でした。貴大学院で学ばせていただいたことに深く感謝し、大妻女子大学の益々のご発展と、卒業生のご活躍を祈念し、筆をおかせていただきます。

離島調査の思い出

岡野(浅川) 雅美

文教大学健康栄養学部 教授



大妻女子大学大学院で博士課程の大学院生として3年間、その後人間生活科学研究所の研究員として5年間、大澤清二先生の研究室でご指導いただきました。当時から大澤先生は、科研費を常に獲得なさっていて、その報告書、論文および書籍などの執筆にいつも忙しくしていらっしゃいました。そして、集中して一仕事を終わられると、助手の先生や院生たちになごやかな話をされ、時に冗談を交えながら、談笑されていたことが今でも印象深く思い出されます。そのような折々におっしゃった言葉が、その後になって考えてみると、深い意味をもっていたことに改めて気づかされることが幾度もありました。特に大きな影響を受けたのはこれから書かせていただく離島調査のことです。

博士課程の大学院生の時、私は研究テーマが決まらず悩んでいた時期がありました。そのような時、大澤先生から「伊豆諸島の中に青ヶ島という離島がある。とても特徴のある島なので、そこにフィールドワークに行ってみたらどうだ」と声をかけていただきました。お恥ずかしいことに、当時の私は、宮崎県の青島は知っていましたが、伊豆諸島の青ヶ島のことは全く知らず、少し調べてみました。その島は、八丈島から南へ約67kmの洋上に浮かぶ人口200人程度の火山島で、島の周囲が断崖絶壁なため良い港に恵まれず、長い間、絶海の孤島という厳しい生活環境の中で自給自足の生活を余儀なく行っていました。しかし当時は、昭和41年の電化を契機にして公共投資も盛んになり、消費社会へと変容して行く過渡期にありました。

その頃の私は、頭が固くて、やりたい課題を決めてからその研究課題に合致したフィールドで調査を行うべきで、取り組みたい課題もないのに離島に行ったら何をしたらよいのだろう、と思いました。し

かし、研究に対していつも真摯な態度で取り組まれている大澤先生からのありがたいお話であったうえに、机の上で考えていても解決できそうになかったため、8月に約2週間の日程でフィールドワークに参加しました。その時の調査のメンバーは、大澤先生が団長で、当時文学部で文化人類学が専門の馬場優子先生、研究所助手の佐川哲也先生、マスターの平山素子さん、食物学科学学生の大木さえ子さんと私の6名でした。

まず、竹芝ふ頭から八丈島に入りました。翌日6名で、村営連絡船に乗って青ヶ島に行く予定でしたが、気候の影響で4日間八丈島で足止めに会いました。当時の青ヶ島は、風が多少強いだけで船が欠航してしまい、そのうえ、ヘリコプターも試行運転中で本格的に動いていなかったため、簡単には行くことができない、心理的距離のとても遠い場所でした。

八丈島には大澤先生のお知り合いで地元の有力者の方がいらして、その方が八丈島の歴史や文化を知るうえで重要なところに案内していただきました。また、八丈島にある青ヶ島会館にも連れて行っていただきましたが、そこで、大澤先生や馬場先生が、ご自分の興味があることについて雑談を交えながら、島の人に聞いていらっしゃる姿を拝見しました。この段階で、既にとても良い勉強になりました。

そして5日目にやっと青ヶ島入りできることになりました。大澤先生は講演のご予定があったため、東京に戻られ、残りの5名で青ヶ島に入りました。到着したその日は、ちょうど年に一度のお祭りの日でした。私たちはフィールドワークに先駆け、お祭りに積極的に参加しました。佐川先生がカラオケを熱唱されてその場を盛り上げてくださったことを今でも覚えています。翌日、佐川先生、平山さん、そ

して大木さんが、東京に帰って行きました。その後10日間、馬場先生と2人で青ヶ島に滞在しました。馬場先生から、いろいろとご指導いただき、聞き取り調査を行いました。初めは非常にぎこちない質問の仕方でした。それにもかかわらず、島の方々は嫌な顔もしないで長時間お付き合いくださいました。

そして、帰る日が近くなるにつれてフィールドワークの面白さを感じるようになってきました。例えば、焼酎つくりの名人の方に、色々と教えていただいた後の雑談で、以下のような興味深い話を聞くことができました。「最近不幸があり、戒名をつけなければならなかったので、八丈島の宗福寺に電話をしてつけてもらうことにした。しかし、だれも電話にでなかったの、私が勝手につけてしまった。ところがその戒名には使ってはいけない文字が入っていて、住職にあとから直された。それにしても、自分たちでつければ院号もただじゃ」と、笑顔で話してくださいました。実は、この戒名の話は、八丈島に滞在中に、馬場先生が宗福寺で聞いていらしたので、既に知っていました。しかし、私たちは八丈島でこのことを聞いて驚いていただけに、この天真爛漫な笑顔の意外性をほほえましく感じました。そして、フィールドワークでは、質問紙調査では知りえない情報を、インフォーマントの非言語的コミュニケーションからも入手できるという、大きな魅力に気づきました。このような研究手法と出会えたことに感謝しています。

さらに、帰る直前には、(色々と文献を読んでも決まらなかったのに、) 研究テーマが固まってきました。具体的には、「青ヶ島」を「内地の東京と大差なく情報を受信できるにもかかわらず消費生活環境が未整備な地域」ととらえて、そのような消費生活環境における消費者の購買行動の特性について検討しようと思いました。なお、ここで考えた研究は、1994年に「離島における伝統食の変容」、1997年に「離島における生活情報受容と食品の購買行動」、1998年に「離島における衣服の購買行動の特性」という論文として結実し、日本家政学会誌に掲載していただきました。

この離島調査で得たことは、研究課題・論文のような成果だけではありません。物事の考え方についても勉強しました。冒頭に述べたように、「取り組みたい課題を決めてから、その研究課題に合致したフィールドで調査を行うべき」という先入観を持っ

ていましたが、まず、フィールド調査に出かけてみて、そこで様々な現象を見たり聞いたりするうちに研究課題が見つかることもあることを体験しました。当時、このフィールドワークの機会を与えていただいたことは、私にとって一生の財産です。

この機会を与えてくださり色々にご指導賜りました大澤清二先生、そして聞き取り調査について教えてくださいました馬場優子先生にこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。そして、大妻女子大学人間生活文化研究所の今後の益々の発展を心よりお祈り申し上げます。

備考：論文のアウトラインは下記のとおりです。

1. 離島における伝統食の変容

電化や交通網の発達といった生活環境の変容が、食生活行動に及ぼす影響について、検討した。なお、本研究では食生活を「伝統食の変容」に限定して考えた。その結果、以下の知見が得られた。

- ①日常食は消失しているものが多いが、儀礼食は伝統儀礼に不可欠なメニューとして存続している。
- ②日常食の中には、交通網の発達や電化に伴う冷凍・冷蔵庫の普及によって1年中食することができるようになり、儀礼食に加えられたものもあった。
- ③儀礼食は、儀礼を行う家と同じ地区に属する女性達共同で作るため、島外出身の嫁も作らざるをえない。したがって、儀礼食は、存続しやすいことが推察された。

2. 離島における生活情報受容と食品の購買行動

電気通信系メディアからの情報は内地と大差なく受信できるが、食品の市場が未整備である地域での消費者の生活情報受容と商品の購買行動について検討した。具体的には、青ヶ島において聞き取り調査と参与観察を中心とするフィールド調査を実施したところ、以下のような知見が得られた。

- ①購買意欲が生じて、意思決定に至ることができないため、内地でなされるような一連の意思決定プロセスが中断されるといった購買行動の変容が起こる。
- ②購買意欲と意思決定がストレートに結びつかない状況が続くと、CM情報を受容しても購買意欲が潜在化し、条件の揃う時、場所に恵まれるまで、意思決定が先送りされる。

3. 離島における衣服の購買行動の特性

「情報化社会においては、人が商品を購入する際、モノの実用性より記号性や差異性が重視されている」という購買態度に関する仮説は、内地の都市部などでは適用しうられると思われる。しかし、この仮説が、市場が未整備な離島のような地域においても該当するか否かを、聞き取り調査および質問紙調査によって検討した。その結果、離島ではこの仮説は妥当せず、商品（衣服）を購入する際、実用性や入手しやすさといった商品に対する接近性に重点が置かれることが確認された。

「生活の学」と研究所

平山 素子

秋草学園短期大学幼児教育学科 教授



大学時代のアルバイトに始まり、大学院、助手、研究員、そして現在に至るまで、人間生活科学・人間生活文化研究所には長き長きに亘り大変お世話になっております。

大妻の管理栄養士専攻に入学したものの、早々に現場の栄養士は向いていないと覚った私は、ただ淡々と授業に出て、免許取得と卒業を目指しました。栄養士として現場で働くつもりがなく、毎日目一杯に(土曜日の午後まで!)授業が詰まっており、しかも大学外での課外活動にも精を出していた私が必修ではない卒論を履修しなかったのは当然の成り行きでした。しかしながら、卒論を履修しないということは、研究室に所属しないということであり、研究室の先生や先輩に論文指導はもちろん、就職の相談をすることもできないということでした。卒業後のことを考えると不安もありましたが、何とかなるとバブル期の呑気さであまり深く考えずに日々を過ごしていました。

チャンスは突然やってきました。ひょんなことから研究所の大澤教授の研究室でのアルバイトを始めたのです。研究所での仕事は大学の勉強とは全く異なり「こんな世界もあるのか」と毎日が新鮮でした。それまでも家庭教師、民宿の住込み、出版社や他研究所でのアルバイト等様々なことをやってきましたが、そのいずれとも違う魅力がありました。まず目を奪われたのは、Macintoshでした。今でこそ誰もがパソコンを所有し使いこなしていますが、その当時(30年程前)は、ワープロ機全盛時代でパソコンの個人所有は高嶺の花でした。アルバイトをしていたシステム開発系の公的研究所でさえ、使わせてもらえた機器はワープロ機能がメインで、ライン一本を描くことさえ苦勞する有様でした。大澤研には当時からMacが複数台あり、アルバイト学生も

積極的に使用することが求められていました。Macを使うようになったことで、学びと創造の世界が大きく広がりました。他所でのアルバイトも充実はしていましたが、補助的な仕事が多く、やりがいと高揚感には雲泥の差がありました。加えて、大澤研の自由で探求心を刺激される環境に惹かれた私は、早々に他のアルバイトを全て辞め、多くの時間を大澤研で過ごすことになりました。大澤研では、大澤教授はじめ、助手の先生方に一から研究というより「学ぶ」ということを教えていただきました。研究室に出入りする研究員始め、他大学の先生方からも多くを学ばせていただき、現在もお世話になっています。現在の私があるのは、大澤教授始め研究所に関わる方々のお陰であり、深く感謝しております。

前述のように卒論を履修せず、研究室に所属しなかった私は、大学では一方的に授業を受けているだけの生活でした。また、主たる科目を担当する先生方が所属する研究室は全員が大妻出身者だったため、他大学の文化を知ることありませんでしたし、その必要も感じませんでした。しかしながら、当時の研究所は、専任教員全員、助手にも他大学出身者が多く、他とは異なる自由で厳格な雰囲気を感じていました。単独で研究を行うだけでなく、他大学との共同研究が当たり前に行われ、研究員の方々も交えて日々議論がなされており、そこに身を置くことで研究するということの一端を知ることができました。物事を深く考え仮説を立て検証を行い結論を導くという一連の過程は、これまで「研究」を全く知らずにいた私にとって非常に魅力的なものと映りました。とはいえ、はたから見ることと実際行うことは全く別物で、ゼミでの議論や卒論作成等を行ってきた場合には当たり前習得しているはずの常識、知識や技能を私は全く身につけておらず、大

学院進学を目指すに当たって大澤教授にゼロから全てを指導していただきました。幸運にも研究所の存在を知り憧れて大学院に入学した私は、しかしながら自分は基礎学力さえも欠如しており、それまで如何に学んでこなかったかを改めて思い知ることになりました。予想外に何も知らない私を前にして、そして大学院在学中も指導してくださる度に、こんな筈ではなかったと心底後悔なさったのではないかと大澤教授には感謝と共に今でも申し訳ない気持ちになります。

大学院では、自分で選んだテーマに沿って研究方法を教授していただきました。自身で内容・方法を決めて研究を進めていく中で、ようやく自由に学ぶことの醍醐味と責任とを痛感しました。今思うと5年もの時間をもっと有効に使えたのではないかという気もしますが、その当時は周りの方々について行くだけで必死でした。

博士課程を満期退学した後、研究所長付きの助手として高石所長と佐野所長の下で勤務しました。高石所長は「ジェントルマン高石」と他大学で称されていたようにとても紳士的で、28歳にして初就職した私に、研究活動についてはもちろん、社会人としての心得、仕事をするということの意味を丁寧に教えてくださいました。佐野所長は学長兼務であったため日常的に接していたわけではありませんが、USB等の新しい技術、ノーベル化学賞受賞者等の話を通して知的好奇心を多分に刺激していただきました。

研究所に所属していた十余年の間は、日々、第一線で活躍する先生方の研究への姿勢を間近で拝見することができました。私自身は、能力も研究への適性もそれほどありませんが、幸いにも大学で学んだ管理栄養士としての知識と、研究所で習得した研究に対する姿勢と方法を生かせる仕事を得ることができました。現在は、小さな短大で幼稚園教諭・保育士を目指す学生と共に子どもの食や栄養、健康について学んでいます。本務校の学生達は、座学で学ぶことよりも身体を動かして体得することが得手のようです。時代と対象に合わせた教育を学生達に行うこと、子どもに関わる事柄を調査研究することで得られた知見を現場に還元し、子ども達と子どもに関わる方々に少しでも資することができるよう努めてまいります。

過去から現在に至るまで、他大学等との活発な交流によって「生活の学」をより広く深く極め続ける

研究所に敬意を表します。

研究所の益々のご発展と関係の皆様様の益々のご活躍を祈念しております。



研究者としての基礎体力を培った日々

宇都宮 由佳 学習院女子大学国際文化交流学部 准教授

大妻女子大学人間生活文化（旧 生活科学）研究所には、研修生、大学院生、そして助手、助教として計16年間（1996～2013年）在籍しておりました。

まず情報部門の研修生として、益本仁雄先生のタイの未電化村実態調査に参加させて頂きました。当時、村までの道路が舗装されておらず、四輪駆動車で上下左右とゆられながら1日ばかりでした。到着すると早々に名簿を片手に村人の出入状況、進学・出稼ぎ、生死など村長さんに確認します。それから質問紙調査やインタビュー調査です。日が落ちると「ろうそく」と「ヘッドライト」をつけて作業するのですが、灯に虫が飛んできて、虫と一緒に食事をすることもありました。また火蟻にかまれて患部が目玉焼きのように二段になって腫れたり、ヒルにかまれたりと痛い目にもあいましたが、村人はいつもやさしく調査に協力してくれました。早朝、農作業前に村人が記入した質問紙を持ってきてくれるのですが、山の湿気でしっとりとして重くなっていたことを思い出します。ここで人と触れ合う研究の楽しさ、面白さを学ばせていただいたように思います。村は、1997年12月に電化し、道路も舗装され、現在では車で市内から3時間半で着きます。イチゴ栽培が成功し、テレビ、冷蔵庫、ノートパソコンもあり、この20年間で大きく変わりました。益本先生には、研修生時代から助教に至るまで、長年大変お世話になりました。先生の「できるまでやめない」「無邪気」の姿勢を継承したいと思います。

大学院修士に進学し、研究所の併任教授でもある大森正司先生にご指導いただきました。それまで自身の研究関連の文献資料のみ読んでいたのですが、視野を広げるよう「自主ゼミ」をすすめてくださいました。食物学専攻の院生4名で「自主ゼミ」をはじめ、研究分野は違うものの互いの実験や調査を手

伝ったり研究経過を発表したりと、とても勉強になりました。最後に「修士生活のすごし方」としてまとめ後輩に渡しました。これは現在のゼミ指導にもとても役立っています。

その後の博士課程では、大澤清二先生、下村道子先生にご指導いただきました。大澤先生には、質問紙調査項目の設計、特に統計分析についてご教授頂きました。当初、食文化の分野において、統計解析を用いた計量的研究があまりなく、論文が掲載されるまで時間かかりましたが、一つ一つ積み重ねることで実績が認められ、日本家政学会奨励賞を受賞することができました。また、科学研究費の申請書でもご指導いただきました。採択された時は、研究者としてようやく認められたと実感し、とてもうれしかったです。

下村先生には、論文のご指導だけでなく、食文化や調理学実習の授業にも参加させて頂きました。食を実践的に学ぶことで、興味の幅が広がり、研究所の助手になった際には、調理師の夜間学校をすすめてくださいました。調理師資格を保有したことで、食文化の非常勤で採用された大学で、調理実習も担当することで、その後、大学教員への道につながっていきました。

先生方には、研究者になるべく多くの機会を与えてくださり、心より感謝いたします。

私が所属した時代の研究所は、4部門あり各研究室には年齢が近い助手の先生方がいらっしゃいました。研修生や大学院生時代は、先輩研究者としてメンターでもあり、心の支えにもなっていました。また自分自身が助手になってからは、頑張っている姿をみることで、とても励みになりました。

所長の高石昌弘先生は、いつも穏やかで、研究室

にはいつも花が生けてあり、大学院の授業では「well being」について学び、健康という意味を教わりました。芦澤玖美先生は、研究を調理に例えて「食材（テーマや内容）が新鮮でよければそのまま、そうでなければ食材にじっくり煮込む」と説明してくださったことをよく覚えています。

最後に、佐野博敏先生には、所長室助手をしていたこともあり、研究以外でも含蓄のある様々な話を伺わせて頂きました。とくに広島の被爆体験「およぐ焼き魚」の話は衝撃的でした。先生のHPにも同内容が掲載されているのですが、NHKラジオの深夜便のインタビュー放送を再度拝聴し、実体験に基づく原爆の残忍さ、唯一の被爆国である日本、平和とは何か深く考えさせられました。佐野先生は、非常に多才で、結核療養で長期安静の際は懸賞小説の投稿、学会のシンボルマークデザイン、年賀状には干支にちなんだ俳句とユニークなイラストで、毎年楽しみに年賀状を受け取っております。研究だけでなく彩り豊かに過ごす生き方を見せてくださいました。

大妻女子大学人間生活文化研究所で、すごした日々は研究者としての基礎体力を培った時代です。そして「研究遺伝子」という、所属した研究室のあり様、考え方が遺伝子のように引き継がれていくことを学びました。現在、大学教員となり、研究はもちろんですが、先生方にさせていただいたように丁寧に学生へ対応していきたいと思っています。

感謝を込めて、研究所の益々のご盛栄をお祈りいたします。



Sweet Memory of My Doctor's Course Journey

Usha Acharya

Department of Health and Physical Education
Tribhuvan University, Nepal, Lecturer

I was born at a rural village of western Nepal. My childhood passed in helping parents in agricultural and household works then only priority for school and study. Life was tough though my deep interest on school and study led to gradually complete study where many of my classmates and friends dropped out on the way.

On the way of study, after completed Master Degree from Tribhuvan University Nepal, I got opportunity to go to Japan for further study. My goal was to get Doctor's Degree from Japan in nutrition or growth of children. So, I was wondering to find professor, at the time I was introduced to Professor Dr. Seiji Ohsawa at Otsuma Women's University, whose research field was human growth of South east and south Asia by Prof. Dr. Masako Kobayasi (Kagawa Nutrition University). At the same time Professor Ohsawa introduced me with Professor Dr. Takuya Kaneda and Dr. Atsuko Simoda at his research center. Professor Ohsawa gave word to support me being supervisor, and then my Doctor's course journey started.

I was entered in academic year 2010 and graduated in academic year 2014. I received unlimited supports, inspiration, motivation and considerations from Professor Dr. Seiji Ohsawa as well as Dr. Atsuko Simoda who always supported me by providing valuable

guidance of study, endurable inspirations and sympathy at the hard times of study phases. Similarly valuable supports provided by Dr. Ohsawa's research team members and Otsuma University team. I would like to heartfelt thank to everybody.

Professor Dr. Seiji Ohsawa always inspired and motivated me for the applicable and meaningful research study. I understood the meaning of research and researcher from him. I always remember his saying "research is the study to do without give up and also intended to explore new things that people are not doing yet". Along with these inspirational and enthusiastic words, I obtained to grab lot of knowledge and know-how of study of human growth and development and other fields which brought changes of my thoughts regarding real study and research.

One the way of Dr. course research journey, I visited many places of Nepal from low land to high land. I and my team walked a week to reach to Sherpa and Bhote resident; we had faced many obstacles during our journey. But, we have met the helpful people with good heart in the village which made us forget all troubles and pains. Those are non editable sweet memories. Not only data collection for study purpose, I could grab the amazing experiences of life styles and

cultures of people from the different societies of Nepal.

Collecting data, setting place and measuring kids was not a easy job, I had used various way to set place, measure child and collect information from their mother. All those ideas were provided by Dr. Atsuko Shimoda. Her long time field research experiences in the South East Asia guided me to work successfully in the very rural villages of Nepal.

‘Study of physical growth of Nepalese children for creating growth standard’, which is new study in the history of human growth research of Nepal. This would not be successfully completed without continuous untiredable inspiration, guidance, supervision, feedback, supports of Professor Dr. Seiji Ohsawa and his team.

Thank you Professor Dr. Seiji Ohsawa Sensei, team and Otsuma Women’s University.

保育現場と研究の狭間にあった日々

ー「幼児の思いやり」についての研究論文作成を支えて下さった先生方に感謝してー

長山 篤子

和泉短期大学 理事／キリスト教保育連盟 名誉理事



この度、大妻学院110周年を記念して研究所から、記念刊行として「新たなブランド『研究の大妻』」を目指して：大妻女子大学人間生活文化研究所の研究の歴史」を発刊なさるとのご連絡を受けました。現研究所所長・大学副学長でいらっしゃる大澤清二教授をはじめ、研究所の先生方が、大学研究所としての研究活動と研究支援に実績を残し、更に新たなビジョンを掲げられる姿勢に心から敬意を表し、幼子の健やかな成長を願い、世界の平和を希求するものとしてその貢献に期待しています。

私が研究所で導かれお世話になった年月を振り返りますと、長い経過を経ていることに、今驚きを覚えます。保育現場で働きながらの研究活動だったとしても、論文のテーマ「幼児の思いやりの発達過程」を、仕上げないままに断念してしまったことに、落第生として恥ずかしい思いの中にいます。しかし、研究所で導かれた研究実績は、その後の年月の中で、私の保育実践と保育研究に豊かな実践と深い洞察が与えられました。完成されなかった論文を眺めながら「主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えて下さる」(旧約聖書詩篇37-23)の言葉を実感しています。以下、研究所で導かれた日々を三期に分けて綴ってみました。

1982年～1988年の頃…最初の一步

私は当時秋草学園短期大学に勤務し、「保育原理」と「保育実習」を担当していましたが同短大の非常勤として関わっていらした大妻女子大学児童学科教授の千羽喜代子先生の後を受け「乳児保育」も担当することになりました。私は研究業績がありませんでしたので、急遽、大学院で平井信義先生と千羽喜代子先生の授業を聴講し論文を出すことになりました。3年が経過した後、平井先生のお薦めで研究テ-

マ「思いやりの発達過程とその精神構造」に取り組むことになりました。職場が彰栄保育専門学校に変わり、付属の幼稚園がありましたので、その責任も持つことになりました。研究は平井先生のもと、グループ研究をしていましたので、私は「思いやり」研究の幼児観察を担当することになりました。この幼稚園の一人の男児E君の成長を3年間観察し(小・中、高校生まで観察、社会人まで交流)、研究グループが定義づけた「思いやり」と判断した行動を抽出、精選し「思いやり行動項目」又は「思いやり観察項目」として仮に設定しました。更に、他園の二名の幼児を長山が観察し「思いやり行動項目」として研究グループで1990年に10大項目と更に50の小項目に纏めました。以上の過程を「思いやりの定義づけ」「幼児の思いやりの発達過程」「思いやりのエピソード」に纏め、上広倫理財団の支援を受け、共同研究として小冊子に纏めました。ここまでは、観察を中心とした年齢を追った「縦断研究」で平井先生・千羽先生に主に指導を受けていました。当時、私はこの過程を研究員として報告することしか出来ませんでした。しかし、この観察項目を一般化するために「横断研究」をすることになりましたので、当時の人間生活科学研究所第二発達環境部門の責任者でいらした教授大澤清二先生にこれからの調査研究のご指導を受けることになりました。大澤先生の大学院の統計学の授業も受講しました。学生のほか、社会人として大塚さんとおっしゃる靴の研究をしていらっしゃる方もいらして励まされました。今は研究所の中核として活躍していらっしゃる下田先生が、大澤先生の助手として私たちの計算機使用やグラフ作成の指導をして下さいました。私のこれまでの研究とは、質の異なった研究でしたが、研究室にいらした若い男女の研究者の嬉々とした活動に魅せ

られました。皆さんの研究を通して調査についての研鑽のない私に新しい視野が与えられました。

1990年～1994年の頃…「思いやり行動項目」の妥当性調査

大澤先生の授業を一年間受けた後(新しい統計学)これまでの観察から得られた「思いやり行動項目」の妥当性調査を1990年に開始しました。「思いやり行動項目のチェックリスト」を作成し、11幼稚園の協力を得て、最初は47名、次に63名の年長児(5・6歳)を観察者(保育者)がアトランダムに抽出し、観察対象児を通して各行動項目の信頼性・客観性・感受性を調査しました。調査の結果の集計は大量で、私一人では担いきれなく、知人の大学院生の協力を得ました。更に観察者(保育者)との協議を重ね、大澤先生の適切な指導を受けつつ、「思いやり行動項目」の信頼性・客観性・感受性を検討し、行動項目に概ね妥当性があると判断し、研究グループで協議をした結果「思いやり行動項目」を「思いやり観察項目」として設定することにしました。この経緯を1991年「児童学研究」第70巻に及び1991年「大妻女子大学紀要」家政系第27号に研究員として記載する事が出来ました。1992年に千羽喜代子先生が研究代表者となり科学研究費を申請し、採択され1993年に大澤清二先生・平井信義先生・千羽喜代子先生連名のもと、研究員として長山篤子が報告書を出しています(課題番号0368079)。私は1992年より青山学院幼稚園の責任を担うことになり、再び保育現場に魅せられるようになりました。保育現場の幼児の生活実態を通して、幼児の成長過程の複雑な仕組みとそれに関わる親・保育者の様相に開眼し、「幼児の思いやりの発達過程」の新しい視野が開かれました。この園で「幼児の思いやり」事例に多く出会い、あらためて「発達過程」を見つめ直し、保育の在り方を学びました。幼児が「受容される」ことから「葛藤体験」を経て「他者を受け入れる」過程を保育現場で学びました。その様相を保育学会(第38・40・43・46回)37回小児保健学会・43回家政学会に発表しました。

1995年～1999年の頃…研究所の方々の協力の元、調査結果を因子分析し「幼児の思いやりの構成要因」を求める

1990年の調査を基に、1995年「幼児の思いや

り行動項目設定における妥当性調査—思いやりの精神構造の追及と行動項目の精選—」と題して日本児童学会「児童研究」第74巻に研究論文として採択されました。因子分析の結果を得て、「幼児の思いやりの精神構造」1～10の因子を得て、図式化することが出来、保育をするものとして大きな示唆を与えられました。大澤先生の「これからが研究所の力を借りられます」との励ましを受けました。調査を3歳から5歳まで1,095名(3歳220名、4歳512名、5歳363名)を対象に「思いやり行動項目チェックリスト」を使い、3、4、5歳の「思いやりの出現状況」を調査し、年齢ごとの出現状況を図式化しました。(「思いやりが育つ保育実践」萌文書林に記載)他国と思いやり項目を比較するため(カナダ)英訳も試みました。千羽先生のご指導で、家政学会に研究論文として提出する予定を立て、取り掛かりましたが、私の能力の限界と、煩雑な保育現場の業務に追われ、論文提出は断念し、1999年に研究所を退所しました。大澤先生をはじめ皆さんに大変ご迷惑をかけました。「ごめんなさい」以外に言葉がありません。しかし、保育者として、保育研究を志す者として多くの賜物を頂きました。その後も平井先生・千羽先生と「思いやりの事例収集」「保育行動の追及」の研究を続け、2冊の本をグループで出版しました。平井先生は天に召されましたが、最後まで共に学ばせていただき、千羽先生は今もご指導くださっています。先日、敬愛する大澤先生にお目にかかり、先生のご活躍に心打たれました。下田先生も覚えて下さっていました。時代を超えて活躍していらっしゃる先生方との対面は、心揺さぶられる感動のひとつでした。私は今も保育実践研究を通して、若い保育者と共に「幼児の思いやり」について学んでいます。「保育現場と研究の狭間にあった日々」に心から感謝します。

私と人間生活文化研究所

—これまでとこれから—

鈴木 和弘

山形大学地域教育文化学部 教授



本年度、大妻学院創設110周年を迎えることをこの原稿依頼で初めて知ることとなりました。110周年、心よりお慶び申し上げますとともに、大妻学院が積み上げてきた歴史に敬意を表する次第です。

さて、この大妻学院に設置された人間生活文化研究所と私の関わりは、大澤先生がこの大学に着任された1988年以降となります。当時、私は筑波大学附属中学校で教鞭を執っておりました。都内に学校があることから、教育や研究の話を聞きに行ったことがその始まりです。私は、大澤先生が筑波大学の講師をしていたころから、研究指導を受けていたこともあり、その縁で図々しくも、時間を見つけては、研究所に足を運ぶようになりました。研究所の雰囲気は、本音を言えば、当時の私にとって何か場違いな、近寄りがたいものでした。中学生を相手に授業や部活動、生徒指導に明け暮れる日々を送っていましたので、研究の進め方や論文の執筆、学会発表の準備、さらには科学研究費の獲得等々、熱のこもった活動に日々取り組んでいる雰囲気に圧倒されたのでした。その一方で、得たことも多々ありました。それは日々の研究活動から具体的なプロダクトを生み出していくというプロセスやコツでした。雑談も含め他愛のない会話も多くあり、これが楽しみの一つで、その会話から形となって残すための道筋とは何か、どうすればよいのかいうことを仄かに感じることができたのも事実です。その一端を振り返ってみようと思います。

附属中の教員として10年が経過しようとしていた頃、同じく勤務している家庭科の先生から相談を受けました。それは、子どもの食に関するだけでなく、体や心の健康に関する本をシリーズで出す企画が出版社からあり、その監修ができる先生がいたら、是非紹介して欲しいということでした。全10巻のセッ

トで、内容構成も相談できる人が欲しいとのこと。私は直ぐに研究所に出向き、本の企画、そして監修を大澤先生にお願いしました。先生から快諾を得て、全10巻、「すぐに役立つ保健シリーズ」として、ポプラ社から1995年に発刊されました。私は10巻目の「性といのちを考えよう」を執筆しました。ポプラ社の編集担当者、大澤先生、そして私とこの本の内容について、議論しながら、進めていったことを今でも鮮明に覚えています。さらに当時、北京大学から来ていた季先生が大澤先生と一緒に共同研究をしておりました。季先生が大澤先生が話したと推察しておりますが、季先生がこの本の存在を知り、後に中国語に翻訳され、中国でも出版されることとなりました。これは私にとっての想定外の出来事。研究所のネットワークの広がりを感じた次第です。残念ながら、現在、このシリーズは絶版になってしまいました。しかし、日本の多くの学校図書館に残されていると思います。附属中の教員時代のもう一つの関わりは、大澤先生から依頼された日本体育・学校健康センター（現；独立行政法人日本スポーツ振興センター）の協力委員でした。これは小中学生を対象に、子どものライフスタイルや栄養・食事、自覚症状、メンタルヘルスに関する大規模調査を行い、その実態を明らかにしようとする取り組みでした。その結果は、1995年12月に「健康に関する調査'95」として報告書にまとめられました。私は児童生徒のメンタルヘルスに関する調査項目の作成とその結果の分析を担当しました。中学校教諭として、日々生徒たちに接していたことが、この調査項目作成に大きなヒントを与えてくれました。しかし、調査項目の作成は一筋縄ではいきません。この時も研究所に足を運び、質問紙尺度の構成などを学ぶことができました。日常の教育活動は、形に残らないも

のですが、調査というフィルターを通して子どもの姿を明らかにすることができることを実感しました。

その後、国際武道大学に移り、研究所との距離は遠くなりましたが、研究員としてお世話になりました。この間、全国的に子どもの体力低下の問題が大きくクローズアップされるようになり、文部科学省は、全国42地域の小学校を対象に「子どもの体力向上実践事業」(文部科学省)をスタートさせました。この事業は、2004年から3ヶ年にわたり展開されました。私が勤務していた千葉県勝浦市に隣接しているいすみ市もこの事業に名乗りを上げ、準備を進めていました。私は、いすみ市がこの事業に参加していることを実は知らなかったのです。この時、この事業全体の委員を務めていた大澤先生から、突然電話がありました。「鈴木は現場での経験が豊富だから、いすみ市での活動に参加し、サポートしなさい」とのこと。数日後、いすみ市教育委員会の担当者が私の研究室に訪ねてきました。曰く「大澤先生から、先生のことを聞いてきました。これから3年間よろしく」、そして私は突然の訪問に驚くばかり。しかし、既にルールが敷かれているような雰囲気でした。これは引き受けるしかないと思い、その後いすみ市の4つの小学校でこの事業に関わるようになりました。中学校教諭の経験は長いものの、小学生を相手にするのは初めてでしたが、ゼミの学生を動員し、私も小学生を相手に体力を高めるための内容を考え、何度となく出前授業を行いました。各小学校の先生方も熱心に取り組んでくれました。さらに大きなポイントとなったのは、養護教諭の方々のサポートでした。学校保健の立場からでも是非一緒に取り組んで欲しいとお願いしたところ、4つの小学校の養護教諭は、担任教諭と同等の、否それ以上の関わりを持ってくれました。望ましいライフスタイルの確立をベースとした体力づくりが必要であるという私の問題意識は、まさに研究所での雑談や何気ない会話がベースになっています。ここでの3年間の取り組みは、私の視野を広げる大きなきっかけとなりました。そして、2007年からは、全国20地域の幼児を対象に「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」(文部科学省)がスタートしました。いすみ市は、引き続きこの事業に参加し、私はここで実行委員長を3年間務めました。小学校での取り組みが、大きなヒントになったことは言うまでもありません。

2012年4月からは生まれ故郷でもある、山形大学に赴任しました。この後も幼児を対象とした国の事業が継続されていることを知り、長井市教育委員会に働きかけ、この事業に取り組むこととなりました。事業名は「幼児期の運動促進に関する普及啓発事業」(文部科学省；2013年)、その後名称が変わり「幼児期の運動に関する指導参考資料作成事業」

(文部科学省・スポーツ庁；2014～2015年)となりました。ここでもいすみ市と同様の関わりを持つことができ、多様な運動遊びプログラムを提供しながら、学生と共に保育者と一体となって活動を継続しているところです。ここでは特にリズムダンス運動を中核としたプログラムを数多く提供していますが、その協力者として、私と同様に短期間ではありましたが、研究所の研究員としてお世話になった霜多正子先生(現、松戸市小金中学校養護教諭)の存在が極めて大きいと言えます。何故なら、霜多先生は保健体育教諭と養護教諭の2つの免許を持っているからです。実践指導のみならず、学校保健の立場で指導できることは大きな強みでもあります。

ところで、私の研究と研究所との関わりでは、やはり科学研究費の獲得ということになるでしょうか。冒頭で触れたように、科研費については、研究所に顔を出すたびに大澤先生が話してくれました。そのこともあり、科研費の意味、その重要性について多くのことを知り、また学ぶこともできました。しかし、学ぶだけではダメで形にしなければなりません。つまり、結果が伴わないと十分な研究ができないということになります。幼小中高の教諭や指導主事向けの科研費には「奨励研究」があります。附属中時代には、この奨励研究に何度も応募してきました。研究所での話をしっかり受け止めながら申請書を書いた次第です。お陰様で、この間6回奨励研究を獲得することができました。その後、大学に移りましたが、申請書の記載量が半端でない！ことにショックを受けました。奨励研究は1年間限定で、申請書も2枚ですみます。ところが大学で申請する科研費はその何倍もあり、無理だろうなと思いつつ、出し続けました。研究所に行った時には、大澤先生に相談し、アドバイスを受け、挑戦してきました。果たせるかな、その壁は高くそびえ8年間出し続けましたが、取得できないままでした。ここで諦めては、研究所に足を運んだ意味もないと、自分自身を叱咤激励しながら、その後も挑戦してきました。そ

して、大学に移り9年目に漸く、平成20～22年度の基盤研究（B）を獲得することができました。研究所でのやりとりが有形無形に私の力となったようで、その後2回、平成23～26年度、平成27～31年度の基盤研究（B）を獲得し、現在に至っております。

最後に、私にとっての人間生活文化研究所は、一つの道しるべ、指針を与えてくれた存在であると思います。そのキーワードは、「多様性」「多元性」でしょうか？私は、そのキャリアから教育畑を長く歩んできました。しかし、教育の質をより高め、内実を伴ったものにしていくためには、研究的な視点を持つことが欠かせないと思っています。多様な専門性を有した優れた研究者がその専門性を活かしつつ、その垣根を超えて多様な立場で自由闊達に議論し、教育にも役立つ成果を還元していく、この人間生活文化研究所がそのような存在であり続けて欲しいと願っております。



研究の起発となる研究所

小磯 透 中京大学スポーツ科学部 教授

大妻学院開学110周年おめでとうございます。

私が初めて大妻女子大学を訪れたのは、1989(平成元)年3月6日(月)お昼頃、千代田キャンパス人間生活科学研究所(当時)の大澤先生の研究室です。B棟244室だったのでしょうか。私が今こうして、学究の端にいて、大学教員としていられるのも、ここを始まりとして、大妻女子大学の人間生活科学研究所で研究らしき事に取り組み始めることができたこと、そしてそれは大澤先生にご指導を頂いたからできたことです。そのお陰でいまこうしていられます。そして、研究活動などのため、大澤先生に指導を受けるための出入りをお許し頂いた大妻女子大学と関係の皆様にも御礼申し上げます。

あの頃私は、普通の公立中学校のどこにでもいる普通の教員でした。いわゆる荒れた学校でしたので、毎日毎日、生徒(生活)指導に追われていました。もちろん職務は問題行動への対応(例えば、学区内の見回り、家出の捜索や警察署への生徒の引き取りなど)それだけではありませんので、日常の職務も当然たくさんありました。保健体育(数学も)の授業、担任として学級生徒への指導や相談は日常で当然ですし、学校行事や保護者会はもちろん、今言う特別支援や不登校生徒のための授業・支援、10数校ある、区の研究の担当(代表)、部活動は三つ掛け持ちで、そのうちの一つはブロック(区が三つ集まって一つのブロック単位をつくり、上位大会進出への基本単位としていました)の運営も担当していました。大変な毎日ではありましたが、仕事そのものの、その教員という職は嫌ではありませんでした(今でもブラックだなんて全く思っていない)。しかし、そんな嵐のような毎日が過ぎ去っている中で、ある日ふと「何かやりたい」と思いました。その時に、大澤先生に相談しよう、と電話したのです。

正直のところ、こんな私が電話しても失礼ではないだろうか、そもそも電話に出てもらえるだろうか、(院生の頃にお世話になっただけの私を)覚えていてくださるだろうか、と正しくおそるおそる電話をかけた次第です(やっぱり止めよう、と受話器をとってもかけられなかったことも何度もありました)。そんな私の逡巡は杞憂でした。電話口の大澤先生は、実に気さくに、快く受けてくださり、お目にかかれるお約束を頂くことができ、その日の訪問となりました。

そしてお目にかかった大澤先生も、そのまま実に気さくに、ずっとお喋りに付き合ってくださいました。何年もご無沙汰し、不義理のままであったにもかかわらず、私の状況を理解して下さり、なんと誉めてくださいました。「えらいな、大学院行くと、大変な中でもそういった志を持つのだね」、と。コンサートの舞台の上から、照明の明かりの筋が細くうっすらとさしてきたような、何だかそんな気がしました。そのときの私は、過ぎ去る毎日の中にいて何かやりたいと思っただけで、何か研究テーマを持っていたわけでもなく、もちろんデータも手元にあったわけではありません。4年あまり、ただ生徒を追いかけて回し、学校の渦の中に翻弄されていただけでしたから、研究には全く無縁でした。本来研究に取り組むなら、テーマや、疑問、意義など、自分の存在に適合した課題に、自ら取り組むべきでしょうから、このときの私のようなただ何となく何かやりたいと思ったくらいでは、研究を甘く見るな、とお叱りを受けて当然だったと思います。しかし、そういった話しはされませんでした。たぶん私の窮状を瞬時にご理解くださり、そういった課題をクリアしていく余裕はない、先ず何かやらせることが先決、とご判断下さったのだと推測します。その場で「ス

スポーツマンの寿命のデータがあるから、やってみたらどうだ」と勧めてくださいました。実際にそのデータをお渡し頂いたのは、その後何回か訪問を重ねたあとでしたが、体育学部を含む、とある総合大学の卒業生の名簿でした。そこには、学部、卒業年、逝去の年月日などが記されていました。

ところが、そんな貴重なデータ、大澤先生のご苦労によって得られたデータを手にしながら、忙しさや現場（研究職ではない）を言い訳に遅々としてその分析は進みませんでした。その間に、自身の職場も変わり、心機一転頑張ろうとは思っても、自分の研究能力のなさにより、全く進みませんでした。パソコンもまだ手元にはなく、勤務校にあったパソコンを使ってちまちま取り組んでいました。例えば、2,000人あまりの寿命の平均値を算出するのに、授業前の休み時間に実行し、授業を終えてパソコンの前に戻ってくるとちょうど計算が終わりそうになっている、そんな状況でした（中高の授業は50分です）。もちろん論文にするには計算だけすればいいわけではありませんから、その文章も書けませんでした。最初に先生に渡した原稿は、わずかA4段組の左側半分くらいのとても論文と言える代物ではありませんでした。そのときも大澤先生は、もう少ししっかり説明して、たくさん書かなくては論文にはならんぞ、と言っただけで、怒りもしませんでした。そんな状況の私でしたから、論文（というよりは書き物）にするだけで精一杯、投稿するとか、査読、だなんて想像の域を超えていました。それもやはり大澤先生の見通し通りで、言われるがままに投稿し、掲載して貰ったのが厚生の指標でした。私の人生初の論文です。小磯透、大澤清二（1991）「わが国におけるスポーツマンの寿命に関する研究」厚生の指標38(1)22-27でした。テーマ、データを頂いてから、いったい何年かかったのでしょうか。あまりに時間がかかりすぎていたので、これではあきれられてしまうと思いきや、今度は英文で書いてみる、と言われたのです。論文も書けない、分析もできない、ましてや英語なんて全くできない私が、計算し直し、論文を書き、それをできもしない英語に書き直して、ようやくできたのがTohru KOISO, Seiji OHSAWA (1992)「ANALYSIS OF SURVIVAL RATES OF SPORTSMEN UTILIZING CUTLER-EDERER METHOD」Journal of Human Ergology21(1)135-151でした。このスポーツマ

ンの寿命の研究については、テレビなどの取材（全部大澤先生にお願いしました）があったり、著作権トラブルに巻き込まれたり（被害者側です）と余談もありました。

その後、勤務校が教育研究校であったこともあり、学校現場での研究に取り組むにあたってもまた、たくさんお世話になりました。公開授業だけでなく普段の授業を見て頂いたりもしましたし、フラッとサッカー部の試合を見に来られたこともありました。論文の執筆、投稿にご指導頂き、書籍の執筆や科研費の一員にも加えて頂いたり、それはそれはたくさんお世話になりました。当時は人間生活科学研究所研究員にも加えて頂いていましたが、勤務校の勤務条件が変わり、定期的に通うことができなくなって、研究員を断念しました。こうして学校現場の教員として少しはましな成果を残せたのも、大妻女子大学で研究に取り組めたこと、大澤先生のご指導を頂けたこと、そのお陰ですし、さらに多くの先生方にもお引き合わせ頂きました。高石先生には、お話を伺うだけではなくわざわざ中学校での授業を見に来て頂きました。中川先生には、中学校での調査の分析をしてもらったこともあります。今では一緒に（と自分では思っています）活動する事の多い、佐川先生、國土先生、中野先生、そして現任校の私の前任である柿山先生やもちろん、笠井先生と出会ったのも、大澤先生の研究室ですし、下田先生にはいつも丁寧にご対応頂いています。齋藤先生には調査・研究にご来校頂いたときに剣道部の部練（その学校は部活ではなく、部練と呼んでいました）で中高生に稽古を付けて貰ったことも有りました。前任・前々任校で大変お世話になった鈴木先生に出会ったのも大澤先生の研究室でした。私が今こうしてられるのも、こういった方々に出会え、お教え頂いている皆さんがいるからですし、それを導いてくださった大澤先生のお陰です。外国へ出かけ、海外に目を向けるようになり、国際教育協力に関わるようになったのも、この皆さんとご一緒するようになったからです。横浜市以降、職場を替わるときにもいつもお力添え頂き、ときには人生相談にまでのおつて頂きました。

重ねて御礼申し上げます。

大澤先生にはまだまだご活躍頂きたいと願い、ご指導頂きたいとも願い、頼りにしているたくさんの方々のうちの一人です。どうかいついつまでもお元

気でお過ごしください。そして、大妻女子大学のますますのご発展を祈ります。



2004年11月

迷走の時、助走、伴走してもらった研究所

西岡 光世

元日本女子体育大学体育学部 教授



私が人間生活科学研究所に研究員として所属したのは1989（平成元）年から1998（平成10）年の約10年間だったように思う。当時私は何回かトライの末やっと日本女子体育短期大学へ専任職を得たばかりであった。しかし専任としては高年齢で、特に目立った業績も少なく、専任になれた喜びはあったが内心はうつうつたるものもあった。そんな時、公私色々相談事があると駆け付ける先生があり、それが大妻女子大学の児童学科、美術担当で画家でもあった長坂光彦先生だった。先生は「研究の目を広げ、深めた方がいいね、僕が紹介してあげよう」と言われ、紹介して下さったのが大澤清二先生であった。研究室は大妻、筑波大の卒業生、中国からの留学生など研究テーマも多岐にわたり、若いエネルギーにあふれていたと思う。

その頃私は単純な統計解析しかしていなかったが、先生のご著書「多変量解析」など参考に示して下さり、難解な統計解析手法を教えて頂いた。1991（平成3）年は私の故郷でもある鹿児島で学校保健学会があり、研究室の皆で参加した。会頭は故郷鹿児島で親しくしていた友人の兄上、鹿児島大学の美坂幸治先生であった。私も「若年女子のダイエット指向について」と言うタイトルで口頭発表した。今でもその傾向があると思われるが若い女性のダイエットが流行し、これから出産、育児を控える女性に健康志向に目を向けてもらいたい思いがありこのテーマに取り組んだ。学会は鹿児島市内であったが皆でタクシーを飛ばし、観光地霧島へ行ったのが懐かしく思い出される。かなりの道のりを行ったにもかかわらず、天気が悪く、ずっと曇り空で、ほとんど何も見えなかった。だれかれとなく不満の面持ちで鹿児島出身の私の顔を見るので「これが本来霧の中霧島でございます」と言って笑ったのが思

い出される。今だから言えるが、学会は緊張する場面もあったが息抜きのも場でもあった。その時の発表などまとめて1993（平成5）年、「若年女子のダイエット行動の動機に関する研究」を学校保健研究から原著論文として、掲載させて頂いた。

1999（平成11）年は本務校が短期大学から4年制大学へ改組され、私は日本女子体育大学体育学部幼児発達専攻の教授に着任することが出来た。改組にあたり、専任教員の資格審査も厳しく、学会発表、原著論文数など審査の1つであったと思うが研究所時代に出来た業績が大きかったと思われる。

専任になったあと、大澤先生の大学院時代の同期生で体育大学に勤務している先生方を紹介して頂き「体育大学生のための学校保健」「学校保健概論」などを数人の共著で出版することが出来た。学校保健の分野は養護教諭養成課程にもあるが体育教諭養成とは内容的にも重きを置くところが微妙に異なり長い間、体育大学生のための教科書として、重宝した覚えがある。

もともと私は母校では栄養学研究室出身で、飲料・食物の社会的研究も行っていた。そのころから、日本は自動販売機の普及は目覚ましく、飲みたい飲料は、冷たい、温かいにかかわらず、どこでも飲める時代となった。糖尿病と甘味飲料の関係など調査した。アルコール飲料も心配であったが色々規制も出来た。その時わかったことは自動販売機そのもの、お金の入った金属の大きなボックスが人気のない所に平然と置かれていることが海外では考えられないともいわれ、「安全」を誇りに思っていた日本で落とし穴もあることに気付かされた。また「安全と水はただ」というのも日本人には不思議ではない感覚であったが今は私も平気で水を買って飲んでいる。環境汚染や水質検査の技術の向上で今まで分からな

かった汚染物質の混入などわかるようになったためかもしれない。

その頃大澤先生の研究室ではタイの健康調査などしておられた。私も知ってか、知らずか影響されたく、退職後は色々な国とホームステイをするクラブに入り世界の生活、文化の違いに触れるのを興味深く経験している。世界の国々が如何に「安全と水」に大きな予算を費やしているかわかる。

この様に自分の半生を振り返ると研究所時代は結婚、出産し、女性として、研究者としてもう1度研究を行うチャンスが与えられた大切な期間であったと思う。当時一緒に研究室の談話会に出席したり、学会に参加した研究生の人たちも今では大学、その他で重要なポストで働いておられると聞いている。

益本研究室の思い出

滝山 桂子

元上越教育大学学校教育学部 教授



教育と研究に長年携わってきた大妻学院が110周年を迎えるということに改めて歴史と伝統の重みを感じるとともに、長い間、教職員、事務局員の方が積み上げてくださったご努力に感謝申し上げる次第です。

私は、平成10年から大妻女子大学人間生活科学研究所の研究員として益本研究室に所属し、長年に亘り、懇切丁寧なご指導をいただきました。ここに、益本研究室での思い出を、記憶をたどりながら、いくつか述べさせていただきたいと思います。益本研究室では、ベテランの益本先生と新進気鋭の宇都宮由佳さんがいらして、お二人のおだやかな笑顔と人柄に支えられ、また、研究に対する真摯で厳しい姿勢から多くのことを学びました。因みに宇都宮由佳さんは益本研究室の若きホープで、海外でのフィールド研究および学会活動を精力的にこなし、また、複数の学会から奨励賞を受賞しています。さらに、博士号を取得して、今では他大学の教員として活躍中です。益本先生は、当時、情報教育や消費者教育を中心とした研究や講義に携わっておられ、広く、タイ国などのアジア、イギリスなどのヨーロッパにも視野を広げて、研究と教育に精力的に活動されていました。

私は、大学を卒業後、中学と高校の家庭科の教員を長年務め、その後に大学の教育学部に勤務することになりました。中高の教育現場に長くいたので、研究者としての蓄積は十分でなく、大学に移ってからは、当初、自己研鑽に多くの時間を費やしました。そんな折、益本研究室で研究員として受けたご指導は、今後研究生活を切り開いていく上で、とても助かり役に立ちました。即ち、勤務大学のゼミの学生さんや院生さんの卒業論文、修士論文指導のためのスキルを向上させることができたと思いま

す。常に基本に返り研究を進めて行く先生の姿勢から、研究の進め方に加えて講義の運営なども、大いに学びました。

また、できる範囲で講義を受講させていただきました。大澤先生の統計学では統計の手法に加えて、客観的に物事を分析する重要性を学びました。生活経営学の講義からは、家庭科を教える立場から、家政学全体の中での家庭科の位置づけを理解することができました。このように、研究指導や講義の受講など、貴研究所から貴重な研究支援を受けることができたと思っています。

研究員の期間における研究の成果を、学会誌に投稿しましたが、論文の作成過程において、益本先生のご指導を受けました。例えば次のようなものがあります。

- ・大学生の生活情報の入手におけるメディア利用の実態分析 日本家政学会誌
- ・テレビ放映された食品CMの実態分析—機能的ベネフィットと心理的ベネフィットに着目して— 日本家政学会誌

これらの生活情報に関する一連の研究などをふまえて、「生活情報の活用による選好評価の変容を測定する方法の開発」(研究代表者)というテーマで、平成14-15年度に科学研究費補助金の配分を受けることができました。

益本先生と宇都宮由佳さんが長年、研究のフィールドとし、多くの論文を発表しているタイ国には、平成18年にゼミ生と一緒に同行し、環境教育に関する小学生・中学生対象に現地調査を行いました。アンケート調査に協力してくれた子ども達は皆素直で可愛らしく、その笑顔が今でも忘れられません。益本先生も、「子どもたちが可愛いんだよ～」とおっしゃっていました。タイのフィールド調査では、土



モン族の村にあったゴミ箱

地の人々との温かい触れ合いもあるのだな、と感じました。異国の地での研究を実施するには、その土地の方との交流が必要で、益本研究室では長い期間かけてじっくりとフィールドを耕してきたことを知りました。そのおかげで環境教育に関するヒアリング調査も実現し、タイ北部に広がる山岳地帯にあるモン族の小学校でも実施できました。モン族は農業に励み、また、伝統技術として刺繍なども盛んです。この山では、以前、ゴミの大量放棄問題をかかえていて、王様がゴミを片付け、観光地として整備し、少数民族を助けたそうです。その当時、ゴミの分別を教育している最中でした。子ども達が観光客を案内するサービスもあるとのことでした。

バンコクにつぐ大都市であるチェンマイでは、寺院や植物園などの観光も楽しく、ホテルの朝食では豪華なフルーツを美味しく味わいました。市場は活気に満ちていて、多種の食料品や衣料品、刺繍を施した手芸品などが並んでおり、夢中になって見て回りショッピングを楽しみました。一方、まだ文明が届いていない未開の山岳地帯にも訪問することができたので、都市的な町、ローカルな村における対照的な光景を目の当たりにし、身を持って比較できたのではないかと思います。日本では地方でも都会的な文化が散見されることが多いのですが、発展途上国のタイ国では、都市と地方における文化の違いが残っているので、文化の伝播や情報の伝達などのフィールド研究が可能になるのだなと実感しました。

訪問時に実施したタイ国での環境教育の調査は、私の勤務大学で、経済産業省の委託事業に代表者として実施した地域連携の環境教育の活動記録に掲載しました。冊子の名称は、「地域連携に基づく小・

中学生のエネルギー教育・環境教育のカリキュラムの作成」で、上越教育大学エネルギー環境教育研究会の活動の成果をまとめたものです。

益本研究室では日本とタイの比較研究をいくつも実施しており、私も少し協力したものに、中学生の情報収集および情報活用能力の日本・タイ比較および女子大学生の伝統服に関する意識と行動―日本とタイの比較―があります。後者は卒論でとりあげたものですが、益本研究室には、卒論生が多く在籍していました。ゼミ生達が自主的にニュースの発行や親睦会など、交流を深める工夫をしていて、研究室は絶えず賑わっていました。このように、教育活動にも惜しみなく汗水を流されていました。

さらに、益本研究室では、タイ国におけるボランティア活動にも長年にわたり尽力してきました。ニコニコボランティアという、小中学校向けの活動基金支援で、日本事務所を運営し定期的に通信を発行していました。この基金は、子ども達の生活・教育を改善するために、現地ならではのプランに対して審査をした上で資金を提供するものです。タイの自然を生かした果物の栽培、家畜の飼育などですが。一例として、バナナの栽培や子牛プロジェクトのテーマなどが支援を受けました。教育・研究活動の合間をぬって、ボランティア活動を続けてきたことに敬意を表したいと思います。

最後になりましたが、長い間、益本研究室はじめ研究所の皆様に多大な教育と研究のご支援を賜りましたことに、ここで改めてお礼を申し上げる次第です。

私と人間生活文化研究所

伊藤 みちる 大妻女子大学国際センター 専任講師



私の人間生活文化研究所との直接的な関わりは、2015年に旧英領カリブ海地域の白人性の構築過程を研究するために研究員として所属させて頂いたことが始まりです。しかし、人間生活文化研究所所長の大澤清二先生とは、かれこれ20年ほど前に教員と学生という関係でした。私が大妻女子大学文学部英文学科2年生の時、今はなき狭山台校舎での土曜日2限という、大学生にとっては最も都合の悪い時間帯に、「生活と文化」という最も興味深く楽しい授業を担当されていました。文化人類学をベースにした授業で、馬場優子先生がミクロネシアやポリネシア、伊豆諸島や小笠原諸島について、大澤先生がタイなど東南アジアについて、その風俗や文化的人类学で用いられる研究手法を紹介して下さいました。

「生活と文化」の冬休みの課題は、参与観察のレポートでした。渋谷のハチ公前と、スイスはバーゼルの吹雪の街角で、公共の場でキスをする人々を対象に2時間の参与観察を行い、結果を比較し、考察をまとめて「Kissing in Public」というタイトルで提出しました。私が20年ほど前に提出したこの課題のタイトルを、現在も大澤先生が覚えていらっしゃることに驚愕しました。しかし同様に、私の同級生が「生活と文化」を履修したことも授業内容も何も覚えていない中、私は授業内容はもとより、大澤先生が現地調査で体験されたことをお話し下さった内容までもはっきりと覚えています。

大妻女子大学卒業後から大妻女子大学国際センターの専任教員となるまでは、新卒でタイ王立ラチャパット大学、その後はジャマイカの西インド諸島大学で教鞭をとりました。英国の大学院修了後、外務省在トリニダード・トバゴ日本国大使館専門調査員として日本とカリブ10カ国の経済・経済社会開発関連業務、また国際捕鯨委員会や国連などの国

際場裡における関係調整を担当、その後は国際開発計画・国連ボランティアのガイアナ駐在オフィス代表としてガイアナにおける開発案件とそれを実行する国連ボランティアのマネジメント業務を務めていました。その活動の源となったのは、他国の文化を批判し否定するのではなく、それをそれと認識し尊重する姿勢です。その基礎を築いたのは「生活と文化」で学んだことであり、その授業を担当されていた人間生活文化研究所所長である大澤先生の影響は非常に大きいと言えます。

本学国際センターの専任教員となってからは、戦略的個人研究費や人間生活文化研究所の共同研究プロジェクトなどを通じ、常にお世話になっています。国際センターに所属する海外からの留学生を対象に、日本語購読の教材として学祖大妻コタカ先生の自叙伝『ごもくめし』を使用しました。この試みによって、本学へ学びに来る留学生に対し本学の歴史・教育理念などへの理解を促すことに成功しました。そして『ごもくめし』購読前後で他大学でなく、本学に留学した意味づけや本学に対する愛着などが変化したかを「人間生活文化研究」に「留学生と『ごもくめし』」として報告しました。さらに本学の歴史や教育理念に関して、留学を考えている外国の学生に伝える必要があると考え、共同研究プロジェクトとして『ごもくめし』の英語訳版と中国語訳版のeBookを出版し、印刷版も作成しました。現在は、日本語学習者にも読みやすく一文を短くした日本語学習者向けの購読教材の製作を考えています。

現在、3年連続で戦略的個人研究費を頂いて、カリブ海地域における白人性の構築過程について研究を進めています。その研究テーマへの関心は大妻女子大学在学中に生まれ発展したものです。大学3年生の春にアルバイトを始めた「カリビアン」なレス

トランで、トリニダード・トバゴやジャマイカ、またキューバから招待されたバンドが生演奏をしていたのが、カリブ海地域研究に関心を持ち始めたきっかけです。大学3年生の夏に1ヶ月間トリニダード・トバゴを旅行し、すっかり魅了された私は、トリニダードの多民族社会を卒業論文テーマとしたいと指導教員であった大崎正瑠先生に懇願したのを昨日のことのように覚えています。大崎先生は頭ごなしに反対はしませんでした。しかし日本語の書籍も限られていて、Amazonなき当時、入手できるカリブ海地域研究やトリニダード・トバゴに関する洋書の書籍は限られていました。そして、ラテンアメリカ研究をしていらした荒井芳廣先生から、当時、面識もない状態であったのにも関わらず、ご丁寧にもカリブ海地域関連参考文献のコピーを大量に頂いたことも覚えています。ちなみに卒業論文テーマとして、トリニダードを研究対象とすることを断念し、代わりに「マレーシアの多民族社会」をテーマに、マレーシアを訪問し、モスクやマンディール、仏教寺院などで人々にインタビューをしたものをまとめ、人々の他民族に対する心情的距離や確執などについて考察を行いました。

大学卒業後もトリニダードの多民族社会への関心は衰えることなく、地理的にトリニダードに近いジャマイカに派遣されるべくJICAの青年海外協力隊へ参加しました。またトリニダード社会に関する強い関心と、カリブ海地域における私の経験と将来性が評価され、英国ウォーリック大学大学院から特別奨学生として迎えられました。そこで世界最大規模のカリブ海地域研究所に所属し、やっと本格的にトリニダードの社会研究に着手することができました。

戦略的個人研究費も頂いていますが、日本の研究者として経験のない私が、日本の学術界で活躍するための第一歩は科学研究費（以下科研費）の獲得でした。人間生活文化研究所に大いに助けて頂いたのが科研費申請書の「添削」です。科研費という研究費があることすら知らなかった私が、基盤研究（C）を獲得することができたのは、人間生活文化研究所の添削サービスのおかげです。研究費申請書の書き方も知らなかった私は、右も左もわからなかったため、添削をお願いしたところ、数日後に添削され真っ赤になった申請書が返却されました。ずうずうしくも何度も添削をお願いし、これ以上の申請書は書けないと感じるまで練り上げた申請書が完成しまし

た。基盤研究（C）「旧英領カリブの多文化共生社会に関する実証的研究：白人性のオーラル・ヒストリー分析」としてトリニダードをはじめとするバルバドスやジャマイカといった旧英領カリブ海地域をフィールドとした白人性構築過程を研究しています。

現在は幸運にも、1年間に2回ほどカリブ海地域に出張を行い、現地のヨーロッパ系市民の方々を対象に、オーラル・ヒストリーの聞き取りを行っています。日本から46時間かけて渡航し、時差が13時間もある現地での調査は体力的にきつく感じることもあります。この研究体制を可能にして頂いた人間生活文化研究所には感謝以外の言葉はありません。私がすべき恩返しは、現地調査の結果を効率よくまとめ、数多くの論文を出すことでしょう。2018年11月には、コスタリカで行われるカリブ海研究の国際学会での発表が決定しました。世界のカリブ海研究の研究者と意見交換することをとても楽しみにしています。

今後とも、多くの知識と多様な情報、そして人脈を持つ人間生活文化研究所にはお世話になりますが、人間生活文化研究所に「頼りきりにならないように」自立した研究者として研究活動を遂行できるよう、頑張りたいです。

ネパールとの関わり

中西 純 国際武道大学体育学部 教授



私とネパールの関わりは、1997年夏にトレッキングに行ったことがきっかけとなった。これは、本学の在外研究のシステムで研究費で助成金を申請し実施することができた。山の師匠である山本正嘉先生（現鹿屋体育大学教授）が、同年にマナスル登山遠征を計画しており、高所順化にエベレスト街道をトレッキングするのに同行させていただいた。

エベレスト街道はネパールにあるトレッキングコースであり、中でも人気の高いコースである。途中にはナムチェバザールや有名なタンポチ寺院があり、最終目的地のカラパールの丘を目指すコースである。このコースを山麓の村々を訪ね、村々の人びとや文化、自然に触れながら歩いた。ただ歩く

だけでなく、自分自身を被検者にしてAMSスコア（急性高山病自己判定表）を起床直後に記入し、パルスオキシメーターを用いて同じく起床直後に動脈血酸素飽和度を測定した。

当時の私の最高高度は富士山であった。富士登山でも標高2,500mを超えるところから高山病の症状である頭痛が出始め、さらにトレッキングでは4,000mを越えると高山病の症状（頭痛、下痢、食欲不振等）が増加した。高所順化行動をとるが獲得するまでにタイムラグがありすぐには順化できず中々苦しかったことを覚えている。4,200mのペリチェでの睡眠時には動脈血酸素飽和度が60%以下まで低下し、経験したことのない頭痛で目が覚め、深呼吸を繰り返し体に酸素を取り入れ事なきを得た。頭痛で目が覚めなければあの世に行っていたかもしれないと思う。

最終目的地のカラパールの丘（5,545m）では、念願のエベレストを見ることができたが、休み休み登らないと酸素不足で歩けず苦しかった。しかし、周りに高山植物が咲き誇っており気を紛らわすこともできた。高所順化を獲得するため、カラパールの丘を2回往復し、カトマンドゥに戻った。その後、アンナプルナ山群一周トレッキングに出発した。エベレスト街道と同様に測定もした。5,000mまでの高所順化が獲得できたため、とてもスムーズにトレッキングができた。トロンパス（5,400m）を通過する時も呼吸は苦しくなるが、歩き続けることができた。

2回目のトレッキングは1999年に1997年と同様に本学の在外研究を利用し、エベレスト街道トレッキングを実施した。この時は師匠より、「事前に富士山で4,000mの順化を獲得してから行ってみたら」とアドバイスを受けていた。トレッキングに出



かける2週間前に富士山の山頂で一泊し、お鉢巡り（富士山の火口を歩く）を2回してからネパールに移動し、トレッキングを開始した。測定項目は1997年と同様で宿泊場所も同じ高度で宿泊し、1997年の測定データと比較した。その結果、AMSスコアは高値を示すことなく、高山病の自覚症状は軽かった。また、高所順化行動が前回と比べ3回多く取れたおかげで快適にトレッキングができた。被検者は1名であるが、富士山山頂で宿泊することで4,000mの高所順化を獲得する可能性が示唆された。

夏のネパールトレッキング：学校体育6月号
1998年6月1日発行

エベレスト街道とアンナプルナ山群一周トレッキング：学校体育9月号1998年9月1日発行

エベレスト街道での実験トレッキングに関する事例的研究—1997年と1999年の比較—：千葉学校保健研究 2005 Vol.2 No.1

その後、何かの打ち合わせで小磯透先生と研究所を訪ねた時に、大澤先生から「ネパールに行ったことがあるなら研究を手伝って」と言われ、再びネパールに行くこととなった。また、「せっかく行くのだから何か研究と結びつけたら」とも言われ、野外教育やレクリエーション教育を専門としていたことからネパールの伝統遊びを調査することにした。

この時は大澤先生が獲得された日本学術振興会の、アジア・アフリカ学術基盤形成事業「アジア学

校保健安全・環境教育研究開発ネットワークの構築と持続的な若手研究者の育成」でトリブバン大学やカトマンズ大学、ポカラ大学で学校保健に関するセミナー、ワークショップ、講演を同行した先生方と行った。

伝統遊びの調査は、カトマンドゥ近郊の中高生（男子127名、女子195名、計322名）を対象に、過去に遊んだことのある伝統遊びについて記述式の質問紙調査を行い、ネパールの伝統遊びを調査した。その結果、伝統遊びは42種類確認できた。この調査は2012年日本発育発達学会第10回大会で発表した。また、上記調査で明らかになった伝統遊び（40種類）を、2012年9月、ネパールのポカラ大学において、「ネパールにおける学校保健安全・環境教育分野における戦略的研究開発方法論」のセミナー参加者（大学生・大学院生）43名（男性30名、女性13名）を対象とし、過去に遊んだことのある伝統・伝承遊びの頻度について、「よく遊んだ：1点」、「時々遊んだ：2点」、「あまり遊んだ事がない：3点」、「全く遊んだ事がない：4点」の4件法を用いて調査した。

男性では、カトマンドゥ近郊の中高生を対象にした伝承遊びで男子に頻度が多かった遊びが、今回の調査で2種類一致した。女性では5種類が一致した。一部ではあるが、伝統・伝承遊びが継続されていることが確認された。この調査は2013年第60回日本学校保健学会で発表した。

2013年3月の日本発育発達学会では、中高生を対象にした伝統遊びをカースト制度及び民族ごとに分類し分析を試みた。中位カースト及び下位カーストは対象者が少ないことから対象から除外し、上位カースト（107名）及び民族（17民族203名）との伝統遊び（16種類）で比較検討した。伝統遊び実施の違いは、2種類確認されそれぞれ、民族が上位カーストより有意に実施していた。そのほかの伝統遊びでは差がみられなかった。

2010年冬より大澤先生のアジア・アフリカ学術基盤形成事業のお手伝いを始めたが、回を重ねるうちにネパールにも菜食主義者（以下ベジタリアン）が存在し、出生時より菜食の食習慣を送る子どもの存在を知った。子どもの菜食が発育に与える影響を調査した先行研究によると、欧米の子どもの対象としたベジタリアンの発育については、子どもにベジタリアン食を摂らせても正常に発育するという見解



と、子どもの菜食が健康に良いかははっきりしておらず、何らかのリスクがあるという2つの見解がある。しかし、開発途上国のベジタリアンの子どもを対象とした調査が見当たらないことや、大澤先生からのアドバイスもあり菜食主義の子どもの発育を調査することになった。また、博士課程にネパールからの留学生のウシャさんがおり、調査の協力を得られたこともきっかけの一つとなった。さらに2014年より人間生活文化研究所で研究員をさせていただくことになりネパールでの調査に拍車がかかった。



ネパールのベジタリアンの子どもの発育は、日本発育発達学会第12回大会～16回大会、日本学校保健学会第61回大会～64回大会で調査結果を発表した。これらの調査をまとめたものを、大妻女子大学人間生活文化研究所オンラインジャーナルに報告書として投稿した。

「ネパールにおけるベジタリアンの子どもの発育発達に関する研究」(2017年3月24日)

「ネパールにおけるベジタリアンの子どもの発育発達に関する研究(第2報)」(2018年3月23日)

「子どもと発育発達」に依頼論文として「カーストと菜食は子どもの発育にどのように影響するか(ネパールの場合)」が掲載された。

ベジタリアン食を摂る上位カーストとベジタリアン食を摂る中位カーストの摂取食物内容と発育の比較及び中位カーストのベジタリアンとノンベジタリアンの摂取食物内容と発育を比較した結果、

- 1) どの対象カーストも加齢と共に発育するが、ベジタリアン食を摂る上位カーストがベジタリアン食を摂る中位カーストと比して、男女とも概ね発育が優れていた。
- 2) 食物摂取内容を比べると、ベジタリアン食を摂る上位カーストが多様な食品を頻回に摂取していた。
- 3) 中位カーストのベジタリアンとノンベジタリアンでは、男女ともノンベジタリアンの発育が優れていた。
- 4) 食物摂取内容を比べると、中位カーストのノンベジタリアンは多様な食品を頻回に摂取していた。

これらのことから、発育が優れていたカースト(ベジタリアンの上位カースト、ノンベジタリアンの中位カースト)は、多様な食品を頻回に摂取していたことから、カーストと菜食は発育への影響があることが示唆された。

大妻学院、人間生活文化研究所の益々のご発展を祈念します。

人間生活科学研究所研究員・研修生 ※在籍年順

第1研究部門	第2研究部門	長部 友加里
川畑 昌子	長山 篤子	鈴木 和
高部 啓子	和泉 禎子	寺嶋 とみ子 (研修生)
呑山 委佐子	井戸 ゆかり	第3研究部門
武藤 治子	矢崎 美智子	
加藤 純代	季 成葉	
加藤 雪枝	西岡 光世	
堤 江美子	笠井 直美	
楠本 彩乃	軽部 光男	
植竹 桃子	高橋 雅子	
武井 洋子	帆足 暁子	
平井 郁子	國土 将平	
数金 昭見	小磯 透	
古山 千佳子	鈴木 和弘	菊田 文夫
熊倉 千代子	浅川 雅美	布施谷 節子
陳 徳珍	池崎 喜美恵	川上 梅
仁平 純子	滝沢 美津子	下坂 智恵
周 霞	木ノ下(河合) 今日子	高森 壽
徐 飛	熊谷(岩本) もりえ	林 隆子
ALI, Mohammad Ayub	平山(武川) 素子	藤田 真弓
Rhamawati, Neni, Trilusiana	内田 洋子	上部 光子
	下田 敦子	高橋 ユリア
	小島 章子	山水 きめ

山本 昭子	崔 景美	第4研究部門
吉村 真由美	渡邊 敬子	滝山 桂子
石田 優子	村上 知子	SRIVANASONT, Patthanit
金昇 信	大井 千代枝 (研修生)	宇都宮 由佳
片瀬 真由美		
金 熙淑		
本間 幸子		
近藤 麻理		

人間生活文化研究所研究員・研修生 ※在籍年順

戸田 貞子	川合 ゆかり	山岸 あづみ
長野 美根	曹 莉	伊藤 幸恵
奥住 いづみ	陳 偉	大西 竜子
加藤 美智子	築館 香澄	竹内 晶子
銘苅 純一	中西 純	仁科 薫
山中 千恵美	渡辺 朗子	柳内 志織
劉 叶叶	大和田 未来	游 凌
劉 慧雲	島本 和恵	阿部 恵理
飯島 彩音	伊藤 みちる	大熊 孝夫
徳永 恭子	烏雲 格日勒	雙田 珠己
安田 和子	霜多 正子	山中 千恵美
伊香賀 玲奈	林 明子	三尾 建斗 (研修生)
宇都宮 由佳	戸田 里和	

大妻で育まれた力を後輩のために

下坂 智恵 大妻女子大学短期大学部 教授



待望の家政学系大学院博士課程誕生

私は、10歳年上の姉が北海道の大学で教員をしていた影響からか、大妻女子大学入学時から大学院への進路を目指していた。大学に入学した年に、運良く本学の大学院修士課程が誕生し迷うことなく修士課程に進んだ。24時間を自分の為だけに使うことが可能で研究に没頭することができた。まず、学校に行き、ガスクロマトグラフ等測定機器のスイッチを入れて機器が安定する間に朝食を食べ、それから実験を行い、実験の合間に手の空いた人が夕食の準備をして、同期の友人や先輩と一緒に研究の話などをしながら食べた。日曜日も出校したり毎日大変だったはずだが楽しい2年間だった。卒業後、博士課程に進みたいとも考えたが、本学にはなく他大の家政学系博士課程に進むには狭き門であり、悩んだ末に助手、結婚、出産の道を選択した。

修士課程を卒業して4年後、大妻女子大学大学院家政学研究科に博士後期課程である被服環境学専攻が増設された。大変喜ばしいことではあったが、食物を専門とする者にとっては、被服分野の研究と合致させなければならず、テーマをあれこれ考えアンケート調査等を実施して研究を行ったが、そう簡単に研究テーマが決まるはずもなく、結論としては、食物分野の研究を続けることにした。

本学の助手、非常勤講師を経て専任教員となったが、一人何役もの役割を担当し、自分の為に使える時間は数時間となり、超が何個も付くほどに忙しく、ベッドに入ったら即、爆睡の毎日が続いた。

勤務地が千代田キャンパスから多摩キャンパスに移動となり、測定機器もない中での研究スタートで途方に暮れていたが、またまた運良く、社会情報学部が新設されたことに伴い、研究の指導に加えて実験機器も使用させて頂ける幸運に恵まれた。他大学

の研究生も経験したが、実験系の場合には、測定機器の準備、後片付けに時間がとられ、ピーカー等ガラス器具の洗浄を含めると、なかなか研究が進まなかった。しかし、勤務地と研究地が同一というのは非常に有難く、授業の合間に測定機器を安定させたり、器具の洗浄や乾燥ができたりと恵まれた環境に感謝した。さらに、自宅も学校の近くに転居したため、通勤時間がほとんどかからず、通常の業務に加えて研究をすることができ、非常に効率的に毎日を過ごすことができた。

ピークの頃は、通常の業務に加え、実験を行い、データをまとめて論文を書き、提出していた論文の校正原稿が届き、他者の研究論文の査読を行い、教科書を執筆し等々が同時進行するという日々であり、悩む時間すらなかった。「悩みというのは悩む時間があるからこそ悩むもの」と勝手に解釈した。

他大での博士号取得を目指して準備を始めた頃に、幸運にも本学の審査委員会が審査して合格すれば学術博士の学位(論文博士)を授与できるようになり、今まで研究してきた成果を論文にまとめることにした。とはいえ専任教員としての業務に加えて論文を作成することになった為、忙しさが倍増し論文を書いていると朝になっていたり、冷凍庫に入れるべき物が野菜室に入っていたり摩訶不思議な出来事が多々あり、まるで真っ直ぐに敷かれた線路の上を全速力で走っている日々であった。

働きながら通常の業務に加えて学位を取得することは大変であったが、お金をもらいながら自分の好きな研究ができ、恩師にも恵まれ、叱咤激励されながら頑張ることができた。このような環境の中で人生を過ごせた大妻に感謝するとともに、綱渡り人生ではあったが、家族4人が健康で、家族の協力が得られたことにも深く感謝する。

今後は、自分を育ててもらった大妻に対し、学院のため、後輩のために努力したい。

大学院卒業生（食物系）の進路

大学院の卒業生（食物系）からなる「皐月会」という組織がある。2018年の修士課程1年生が第47期生となり、総勢166人である。発足当時は、5月に実施していたが、大学院生の多くが会員となっている学会の発表が5月に行われるために時期をずらし、毎年11月の土曜日に会合を開き、卒業生、在学生との友好を深めている。

卒業生は、現職の状況や大学院時代にやっていた良かったこと、就職のアドバイス等について話し、大学院生は現在進めている研究について説明し先輩



2017年11月25日 皐月会

から助言をもらったり、卒業後の不安を解消したりしている。小さい子どもを連れて参加する卒業生もあり、先輩から子育てのコツを伝授される等有意義な時間を過ごしている。

2016年、2017年は、大学で教鞭をとっている卒業生に講師をお願いして、後輩の為に話題提供してもらい活発な質疑応答が行われた。2018年も大学院生が研究で忙しい中、現在大学に勤めている卒業生に連絡をとり準備を進めている。

卒業生は、幅広い分野で活躍しており、大学や短期大学、専門学校、高等学校や中学校の家庭科教員になっている人が多く、その他、研究所、商品開発センター、保健所などに勤めている人もいる。

大学院が設置されてから47年目となり、既に定年を迎えた卒業生もいて世代交代が続くが、今後の大妻生の活躍を期待している。



2015年11月21日 皐月会



2016年11月26日 皐月会

白に始まり白に終わる人世

内田 洋子

倉敷市立短期大学服飾美術学科 名誉教授



大妻学院が創立110周年を迎えたことはまことに慶賀の至りで、卒業生としてうれしい限りです。中学に入学した時にはまだ大妻コタカ先生がご存命で、中高6年間新聞委員であった私はよくコタカ先生のお宅や学長室に伺い、「豆記者ガンバレ!」と激励されたものでした。大学卒業後は独身貴族?を満喫しすぎ、父の余命があと半年というときになってはじめて、人生を甘く見ていた悔恨と焦燥感に駆られました。当時、専門学校やカルチャーセンターなどで手芸編物の講師をしていましたが、技術を支える学問的・科学的根拠を習得する必要性を感じ、大妻女子大学大学院の門を叩きました。中学以来のドキドキの受験でした。幸い合格しましたが、10年間の勉強とのブランクは浅学非才な私には厳しい毎日でした。入学から父が亡くなるまでの2ヶ月間は父の入院する病室が私の勉強部屋でもあり、ここから登校し、勤務にも行きました。授業はドクターコースの方とも一緒に受講するチャンスが結構あり、大妻女子大学以外にお茶の水女子大学や筑波大学出身者、またすでに大学教員のかたがたが沢山おり、研究姿勢を垣間見ることができました。

所属研究室は意匠学—色彩やデザイン分野です。色彩は感覚的な分野ですが、各人の眼の構造、とりわけ網膜における視細胞の数や分布に個人差が大きく、脳では色に対する過去の経験や好みが付加された色知覚となるので、色のセンスの良否などは結局個人の好みに帰着します。それらを踏まえた色彩調和や伝統色・流行色などを学ぶと同時に、蛍光灯下で見る牛肉より白熱電球下の方が美味しそうな肉に見えることでわかるように、演色性の良い照明光源について実験したり、色の測定、周囲の環境による色の変容など、カラーアピアレンスや色彩工学の基礎的研究に取り組んでいる研究室でした。

私の研究テーマは「蛍光増白布における白色度の評価方法」についてです。塩と砂糖ではどちらが白いでしょうか? また、白い紙はメーカーによって微妙に異なっていることをご存知ですか? 白さの度合いを白色度といい、一般的に白色物質は白いほど高級と見なされ、昔から白さに対して飽くことなく追求されてきました。たとえば紀元前3000年のエジプトでは漂白土が、古代ローマでは硫黄が、その他、レモン・ライム・タマリンド・マンゴ・カタバミ・硝石・滑石・石膏・火山灰----が漂白に用いられてきました。1799年に漂白剤が誕生し、1929年に蛍光増白剤が登場します。物理的には100%反射する物体(完全拡散反射面、残像ながら存在しません)が完全な白です。ところが蛍光増白布はスペクトル470nm付近の短波長域で100%を越えますが、それ以外の波長域の反射率は100%よりかなり低いのです。にも拘らず、完全拡散反射面に近い白色物質よりはるかに白く知覚され、白さの概念が大きく変化しました。蛍光増白剤は白のワイシャツやブラウスの布に染料として使用されていますし、洗剤にも混入されていますので、きわめて身近な問題でもあるのです。

白さを評価する方法には①官能検査と②試料の測色値から白色度式を用いて白色度指数を算出する方法があります。しかし、①の方法では熟練者が必要です。今はそうした人が極めて少なくなっています。②は誰でもできる方法ですので主流になっています。白色度式は1935年に綿の白色度を評価する方法として生まれました。その後も多くの式が提案されてきましたがいずれも視感評価と一致せず、より有用な白色度式の誕生が切望されていました。そこで修士論文ではそれまでに作られた白色度式の特徴を調査・分類し、白布試料を作って視感評価実験

を行いました。そして、まだ不十分でしたが少しでも有用な白色度式を提案しました。

修士課程修了後、大妻女子大学や他大学で色彩・デザイン学や手芸編物・被服構成学などの非常勤講師をしながら、指導教官の元で白色度の研究を続けることができました。

研究は使用する試料をすべて手作りするところから始まります。未晒しの綿布乃至ポリエステル布をごくわずかに色みのあるさまざまな白に100種程度染色、測色、その中から選択して、視感評価実験に供します。とにかく白色試料は白さの維持が難しく、汚したり退色させないことに神経を使いました。実験は規定されたランプの下で20種程度の白布試料を一对比較法や順位法で白さの評価をしていきます。そして、その結果から白色度式を構築していきます。当初はまだパソコンの出始めの頃でしたので、測色計算や統計計算はすべてMS-DOS上でベシックによるプログラムを組み、一つ一つの計算を確認しながら、極めて非生産的な方法で行っていました。

実験データの統計処理方法はまったく未知の世界で、毎年、大学院で開講される統計学の授業を受講させていただきました。統計的分析のある論文を受講生の前で紹介する授業では、その準備にてんやわんやした事が懐かしく思い出されます。余談になりますが、授業はいつも2限でしたので、授業終了後は附置研の研究室で先生や助手の方々とお昼をご一緒させていただき、楽しいひと時を過ごさせていただきました。連日異なる職場を飛び歩いておりましたので、この時間は心とむ唯一の時間であり、ストレス解消の時間でした。

さて、どのような環境下でも有用な白色度式を提案することが私の大きな目標でしたので、種々の視環境を想定して次のような調査を行いました。①照明光源の照度レベル100～11400lxまでを7段階に変容させたときの白色度評価の相違を実験 ②相関色温度5000～20000Kおよび直射光下における白色試料の評価の変化について推測 ③観測者の相違による白さの見えについて20人の等色関数を用いて分析 ④水晶体の分光透過率を用いて眼内吸光度の変化に伴う白さの見え ⑤年齢別平均観測者の等色関数による白さの見えの相違 さらに、⑥試料の材質や被験者の異なるさまざまな白色度実験から得た評価を主成分分析しました。主成分分析の結果、

白さの因子は明度、色み、色み量、純度、蛍光性であることが分かりました。さらに、①明るい(Y値)方が白い ②Y値が低くても青み白の方が、黄み白より白く知覚される ③CIE表色系の色度図中、光源点と470nmを結ぶ直線が白色度の基準線となる ④色相は基準線に近い試料の白色度評価は高く、離れるほど低い、ということが推測され、これらに基づく白色度式を完成させました。

修士課程修了後10年、主査となる指導教員が定年で御退職する年、上記の内容で学位論文の審査を受け、博士号を取得することができました。白色度式が学会誌に掲載された後、日本の染色会社から有用であるというお電話をいただいたり、さらに若干手直しをして米誌CRAに掲載された時には、エルサルバドルの染料会社から問い合わせを受けるなど反響もあり、今でも内田白色度式と呼ばれています。

その後、人間生活文化研究所の研究員となり、研究方法や統計処理方法などを学びつつ、白色度の研究を続行しました。倉敷市立短期大学に着任後は、照明光源にさまざまなフィルタを装着して白色度を評価したり、LEDが出始めましたので、種々のLED下と常用光源D65下での白色評価の相違などについて、調査を行いました。また、黒色についても同様に視感実験を行い、黒色度式を日本色彩学会誌で提案しております。

大妻中学に入学した時からはや55年になります。10年位前から美女会と称して、中高大で一緒だったかつてのやんちゃ娘4人が、年2回、旅行や食事会をしています。そのときいつも出てくる話題が「大妻、良かったよね」です。高校時代に70年安保そして学生運動が盛んとなり、その後はウーマンリブの女性解放によりあらゆる職種や役職の門が女性に開放されてきています。しかし、時代が変わっても大妻の校訓「良妻賢母」と「恥を知れ」は変わりません。人一人生きられない社会にあって妻として夫に寄り添い、母として家族を包んでいくことに古いも新しいもありません。また己に恥じることなく正道を歩むこと、これは人が生きる道のはずです。そして、こうした教えが卒業生たちを支えていることは事実です。今、各大学が生き残りをかけてさまざまに変革しつつあります。今後、大妻も時代のニーズに合わせて学部や学科が再編されることかと思いますが、理念が変わることなく、大妻が未来永劫存続することを願ってやみません。

博士論文（博人乙第1号）にまつわる思い出

川上 梅

実践女子大学生生活科学部 教授



大妻女子大学人間生活科学研究所には、1991年から1998年までの7年間にわたり研究員として在籍し、博士（学術）（大妻女子大学 博人乙第1号）を取得しました。博士論文のテーマは、「衣服設計を目的とした身体計測データの総合的解析法に関する研究―計測対象集団または計測条件が異なる場合の評価法―」でした。当時は、東京家政学院大学に勤務しておりましたが、内容は、修士論文の後続の研究であり、

- ①公表されている体格調査のデータを再解析し、日本人男女0歳～59歳の加齢による体型の変化を「サイズ－肥満度」上に配置させたもの（Ergonomics、1995）、
- ②日本とタイの男女の身体計測を行い、体型を比較したもの（家政学会誌、1995a、1995b）、
- ③タイでの身体計測の経験がきっかけとなったテーマで、周径計測値の着衣の影響による増加量を服種、布厚さ、ゆとりの折り方などから予測したもの（日本繊維製品消費科学、1996a、1996b）

などを中心とする内容をまとめた論文でした。博士論文のテーマや構成を考えるにあたっては、主指導教員の松山容子先生にご指導いただきました。また、私の大学時代の先輩である高部啓子先生には学外審査員として被服構成学の立場からアドバイスをいただきました（その後、現在の勤務先である実践女子大学では、4年間にわたり上司としてお世話になりました）。また、当時の研究所長であった高石昌弘先生には大局的にご配慮いただいたことに非常に感謝しております。

博士論文の思い出として心に残るのは、博士論文の柱の一つとなった“Ergonomics”に掲載された英文論文です。大妻女子大学の図書館で偶然、“Ergonomics”（Taylor & Francis Ltd）のジャーナルを目にし、投稿を決め、当時の日本人編集者であった野呂影勇先生宛に論文をお送りしました。すると数か月後、翌々週の編集会議で渡英されることで、至急、私の論文中のグラフを“Ergonomics”に相応しいツールで作り直すよう、自宅にお電話をいただきました。論文の内容は、公表されている各集団の基本的な統計データ（平均値、標準偏差、相関係数）からそれらを統合した全集団の相関係数などを求め、主成分分析を行う方法を定式化し、1980年日本人の体格調査の結果に適用したものです。この論文については、統計学の立場から、現所長である大澤清二先生にメタアナリシス（meta-analysis）という概念があることを教えていただき、さらに、「多変量解析実例ハンドブック」（朝倉書店）への執筆者としてご推薦をいただきました。私にとって生活科学分野以外の図書の執筆は初めてであり、この図書は様々な分野の研究者の目に触れるもののために、後に医学の博士論文をまとめていた甥から、私の執筆内容を見たとき聞いた時には、身内が読むことは全く期待していなかっただけに嬉しい驚きであったという記憶があります。

博士論文のもう一つの柱となったのは、海外での身体計測やアンケート調査であり、タイでのフィールド調査です。この調査は、私個人でできるものではなく、大妻女子大学タイ王国生活調査団の一員として調査に参加させていただき実現したものでした。タイの調査は、1992年3月6日から19日までの2週間、「北部タイにおける生活情報と衣・食生

活との関連性」という共通研究テーマの下に、団員16名が7班に分かれて調査研究を行ったもので、当時の研究所長であった近藤四郎先生には大変お世話になりました。私が所属した被服班と生体計測班は、チェンマイ市近隣のサンカンペン高校、パオビタヤコム高校、チェンマイ教育大学で、生徒や大学生を対象にアンケートによる意識調査を行うとともに、従来十分なデータが測定されていないタイ青年の身体計測を行いました。帰国後、日本青年についても同様の調査および計測を大妻中野中学校・高等学校等で行い、両国間の比較を行いました。ここでも近藤四郎先生、松山容子先生、笹本信子先生、眞家生先生などの大妻女子大学の先生方にも大変お世話になりました。本研究テーマは、25年前のことであるにも拘わらず、近隣アジアと日本との国際比較という非常に今日的なテーマであり、このアイディアと実行力はさすがに大妻女子大学人間生活科学研究所によるものであったと改めて感心しています。

最近の私は、専ら消費者の意識などの要因の調査に関する研究を行っております。体型も消費者要因の一つですが、その範囲は化粧意識や色彩嗜好にまで拡大しています（日本繊維製品消費科学、2016、2018）。基本的にデータ解析が嫌いではないので、データを収集し、そこから大きな結論を導き出すという点では共通するものの、我ながら研究対象が発散し多様すぎると思うのですが、在職期間がカウントダウンに入った今日、「ヒトが衣服を着る」ことに関する、私なりの集大成の時期に入っています。日本タイの比較という国際比較の機会を早々に与えられていながら、国際比較をさらに進めることができなかったことは残念ですが、今、進めている消費者の地域差・文化差にはどこかで繋がっているような気がします。人間の生活は科学技術によって変化しますが、基本的な文化差は地域差として残っています。

大妻女子大学は都心にあるきれいなキャンパスで、当時の大妻女子大学人間生活科学研究所には、学問に対する厳しさとともに、他の多くの家政系女子大に比べて研究に対する意識が高く、羨ましいくらいに学問を楽しむ余裕があったように思います。大学は研究と教育を行うところですが、被服系の教育を行う我々は、学生の要求に合わせて教育内容を変えていかなければならないところがあります。そ

のような場面でも、研究者としての視点を持ち、学問的レベルを維持していかなければと肝に銘じていますが、これを支えるものは、大妻女子大学人間生活科学研究所の研究員時代に培われた、研究に対する誇りや憧れのようなものであると思います。大妻女子大学人間生活文化研究所が人間生活に関する研究を楽しみながら本格的に行う研究所として、今後も時代を先取りしながら、家政学系の貴重な研究機関として益々発展されることを心より期待しております。

人間生活文化研究所に育てられた 民族服研究者として

下田 敦子

大妻女子大学人間生活文化研究所 専任講師



研究者になろうと思いつ

私は平成5年（1993年）3月に被服学科を卒業した後、助手として狭山台校の勤務に就きました。主として学生のお世話と授業の補佐が仕事です。授業の一つに、後に指導を受けることとなる大澤先生と馬場助教授の「生活と文化」が開講されていました。前期を大澤先生が東南アジアについて、後期を文化人類学の馬場優子助教授がオセアニアについて話されていました。大澤先生の授業では毎回40から60枚くらいのスライドが準備され、タイをはじめとした各地のフィールド調査の風景が紹介され、収集されたデータについての解説がありました。私は教室の隅に立ったままで、毎回、フィールド研究というものの醍醐味を感じていました。テレビで放映される興味本位に仕組まれた探検番組や旅行番組と違って、海外調査の困難さや、成果を得たときの喜びが伝わってきました。後になって聞いたことですが、国際センターの伊藤みちる先生もこの教室にいて、タイに出かける動機になったとのことでした。

なかでも中国大陆における漢民族の形態が南ほど小さく、北へ進むほど大きくなる、などというダイナミックな学説が次々と紹介され、「人間とは何か」を探究することに強く引き付けられました。講義も最終回が近づいてきたある日に「私でもこういう研究ができますか?」と聞くと、先生は「もちろんです。興味があるのなら研究所にいつでも来なさいよ。」と気軽に言われました。この後、時間を見つけては、千代田の研究所通いがはじまりました。当初は被服学に関連したテーマを学びたいと考えていました。

履物研究と思いがけない幸運

当時は、研究所に近藤四郎教授という高名な足の

専門家がいらっしやり、珍しいアジア各地の靴標本も沢山おもちでした。祇園のお茶屋さんのトイレに有ったという飛び切り珍しい下駄や、中国雲南省の白族の美しい刺繍靴などを、標本を手に入れた近藤先生から直接ご説明いただく機会にも恵まれました。先生のゆっくりとした丁寧な話し方には独特の深い教養を感じました。次第にアジアの多様な民族靴の美しさと機能性に興味を感じるようになり、本格的に民族履物を研究してみようと思った決心しました。

近藤先生から福山の靴資料館や大阪の民博を紹介していただき、幸い大澤先生のご友人の田村克己民博教授のご厚意で、民博の収蔵庫の膨大な靴標本を利用した研究ができるようになりました。それだけでなく、民族服研究の権威者大丸弘民博教授のご指導を受けることができるようになり、そこで「靴の固有属性分類」を知ったのです。この分類法に大澤先生がnumerical taxonomy／数値分類を対応させることを提案され、近藤先生も賛成してくれました。最初からこの分野の一流の諸先生方の指導を受けられたのは本当に幸運だったと思います。

民博の収蔵庫にある中国大陆から収集された標本を対象にして、固有属性分類から数値分類をすると、これまでには知られていなかった民族靴の地域性が明解に姿を現してきました。中国大陆には漢族・沿海州の民族靴クラスターが、シルクロード沿いにはウイグル族やキルギス族などの民族靴クラスターが、そしてチベットなどの内陸高原にはラマ教文化圏の民族靴クラスターが分離されました。民族靴には明らかに地域的な連続性と分布偏移があるのです。

この初の論文は家政学会誌に採択され、ついで柳井晴夫先生が編集された朝倉書店刊の「多変量解析実例ハンドブック」に家政学分野の計量分析の代表例として収録され柳井先生からもお褒めいただきま

した。最初の研究が自分でも驚くような結果となり、夢のようでした。

海外フィールド調査の開始

こうして研究に魅せられつつあった私に大澤先生から「そのうち博士号を取ったらどうですか」と言われました。全くそんなことは考えたこともなかったのですが、まず研究員にしてもらい、1995年に、北タイのフィールド調査に初参加させてもらうようになりました。山地民の子どもの発育や生活調査などのお手伝いです。総勢10人くらいの大所帯が現地ではさらに膨らみます。4輪駆動車を連ねて、山の中の村々を訪ねました。チェンマイから4時間くらいかかる山中の村に行く時などは、途中の小川に材木を架けて車を渡し、ひどく屈曲した坂道をえんえんと登って行きました。到着した時にはもうくたくたです。しかし調査対象者はほんの数人しかいなかったこともあります。フィールド調査は目標が明確でないと続きません。先生はしばしば、10年も続ければものになる、と言われていました。共同研究者の皆さんは既にベテランでしたので、ストレスを感じていないようでしたが、私はついてゆくのがやっとで間違いばかり起こしていました。しかし数年後には私自身が旅行の手配から現地との交渉、データ収集、入力、解析の段取り、団員の世話などができるようになってきました。

海外調査はいつどこで何が起きるか分かりません。旅行にはトラブルがつきものです。現地での事故、病気、盗難、紛失、現地側の不手際、天候の急変などなど計画の変更はよく起きます。だんだん図々しくなってきて腰が据わるようになりました。しかし、海外調査は段取り8割、仕事2割の世界であることに今も昔も変わりないと思います。

博士論文研究テーマの取り組み

平成11年（1999年）に助手となりましたが、平成28年（2016年）3月まで研究員を続けました。現地を訪問するうちに、アジア諸民族の伝統衣服の消失が近い将来に迫っていることを知るようになります。手間のかかる手製の民族服は工場で大量、安価に生産される既製服に圧されて、消失寸前です。民族服の製作技術者もどんどん居なくなっています。しかも山地民はほとんどが無文字社会なので、製作過程を記録した文字資料もなく、映像も残って

いません。技術を継承している人が亡くなれば、その時がその民族の衣服製作技術の消える日になってしまいます。

「そうだ、これを自分の研究テーマにしよう」とおもいました。さっそく伝統衣服の製作過程を自分自身でも体験しておくために、人口の多い山地民であるカレン族に焦点を絞り、一人の有名なアブタセアタセ（カレン語で衣服製作技術の名人）のお弟子になりました。チェンマイ県ドーイサケット郡に住むパーペーというおばあさんです。やがて私も3年ほどすると、彼女の体の使い方、身体技法をまねしながらなんとか一通りの技術をなぞれるくらいにはなってきました。次にこれら技術過程を映像で記録し、個々の技術や、機織りに使う器具名などをタイ語と国際音声標記に置き換えていきました。これでまずは第1段階の目標の「技術の記録・保存」という山は越えました。次いで、これらの染織技術を材料から縫製・装飾まで仕上げていく過程を、より簡単に習得できるように再構成するフェーズに入りました。技術過程を158の細部に分け、製糸、染色、織、縫製などの分野ごとに技術体系を再構成するわけです。そのために技術習得中のカレン女性たちの一人一人から158技術要素の出来、不出来を評価したデータを収集して、さらにこれらの一つ一つの技術要素に対して項目反応理論による難易度の計量を行います。

結果としてこれらの技術学習を「やさしい技術から難しい技術」へと再構成することが出来ました。第2段階が終わりました。さらにこの再構成された技術学習プロセスをタイ語のテキストに編集して学校教育で教えられるかどうかの検討をします。幸いにも学校で実験的に教師役になってくれる機織りの名手が現れました。スゲーさんです。実際に実験的に行ってみると、これまで長大な時間がかかった機織り学習が、学習順次性を優先した教程によって、ずっと短時間で学習可能になりました。

このテキストは現在でもタイ国チェンマイ県の中学校などでカレン族の女性たちが職業教育で使用しています。こうして第3段階を越えることができたのです。

これらの研究によって「博士（生活科学）第1号」を大妻女子大学大学院からいただきました。長い道筋でしたが充実した日々でした。東京フォーラムの別室で学長から学位記をいただいた時には自然に涙

ぐんでしまいました。さらにこれは平成30年度の
科研費の研究成果公開促進費・学術図書でマン
マーブックセンター（ヤンゴン）から出版できるよ
うになりました。下記の書籍です。

[Development of a Methodology for
Optimizing the Oral Transmission of
Traditional Closes-Making Techniques in a
Preiterate Society]

なお、日本語版は家政教育社から「無文字社会に
おける染織技術の伝承」を出版しています。宮原佑
弘社長には本当にお世話になりました。

おわりに、とこれから

これらの研究は全て科研費の助成（2002年から
2021年まで）で行いました。若手研究（B）を2回、
基盤研究（C）を2回、基盤研究（B）を2回、研究
成果公開促進費をいただきました。今年は前述の伝
統衣服製作技術の研究方法論を使って、東南アジア・
ミャンマー135民族の技術の伝承過程の解明と保存
に取り組んでいます。まずは83民族の男女の正装
衣装を収集中です。これはミャンマー民族開発大学
の全面的な協力を受けて進めています。大澤先生が
作られた人的ネットワークがあればこそそのミャン
マー全土に広がる大調査ですが、大学をあげて協力
していただいています。現在私は大妻女子大学博物
館の学芸員養成課程の教育にもかかわっていますが、
やがてこの研究成果が大妻の教育と研究の財産
になることを期待しています。近い将来、これらの
素晴らしい民族衣装の特別展を民族開発大学博物館
と共同開催したいものです。



ミャンマー民族開発大学の女子学生らと（2019年2月、写真中央が下田）

博士号取得者(1985—)**課程博士**

猪又 美栄子(1985)

子どもの歩容と履物に関する生機構学的研究

高部 啓子(1985)

着衣基体としての人体の形態類型化に関する研究

小山田 桃子(1986)

着衣基体としての成人女子の肥り痩せに関する研究

李 英淑(1986)

末梢と体幹の温冷感および体温調節機能からみた被服・類被服の研究

井戸 ゆかり(1989)

日本人若年女性層における意識とくに気がねと被服行動に関する研究

布施谷 節子(1990)

乳幼児の成長・発達からみた衣服の構造設計に関する研究

吉村 真由美(1993)

人体の三次元形状の把握ならびに衣服裁断用ダミー設計への応用に関する研究

アチャヤ ウシャ(2014)

ネパール幼児の形態特性の解析と身体発育標準値の作製

論文博士

岡田 宣子(1986)

The Relationship between the Modernization of Physical Characteristics and the Awareness of Clothing Preferences in Japan (日本人の身体形質の近代化と衣生活意識との関連性)

加藤 雪枝(1988)

被服における形態と色彩効果に関する研究

山田 忠利(1988)

成人の歩行からみた靴設計に関する運動力学的研究

笹本 信子(1989)

ヒトの姿勢および歩行から見た和装の機能性に関する研究

武井 洋子(1990)

学校教育における被服の製作技術指導に関する研究

大村 知子(1991)

三世代家族における衣生活に関する情報受容と衣生活行動についての研究

楠本 彩乃(1994)

フィリピン・イサベラ州と日本の子どもの成長と足形状の人類生態学的研究

内田 洋子(1994)

蛍光増白試料の視感判定と白色度評価に関する研究

山本 昭子(1996)

女子高齢者の足型および歩容特性からみた履物設計への提言

本間 幸子(1996)

骨格筋における酸素供給量および消費量の非侵襲的測定に関する研究

大塚 斌(1997)
現代日本人の歩行に合う靴の研究—足と靴型と靴との関連—
川上 梅(1998)
衣服設計を目的とした身体計測データの総合的解析法に関する研究 —計測対象集団または計測条件が異なる場合の評価法—
下坂 智恵(2000)
調理による魚骨の軟化機構に関する研究
加藤 純代(2005)
身長成長の個性に関する研究
宇都宮 由佳(2006)
タイ北部における児童生徒の間食選択の構造に関する計量的研究
榮 光子(2008)
新規化粧品素材の開発に関する研究 —新規ポリアニオンを用いたコンプレックスの形成とその挙動—
村上 知子(2008)
調理における冷凍の利用—冷凍処理の物性に及ぼす影響—
戸田 貞子(2009)
高齢者の口腔内状態の評価と適切な食品の調理に関する研究
Neni T. Rahmawati(2009)
A Study of Growth and Somatotypes of Indonesians
下田 敦子(2012)
カレン無文字社会における伝統衣服製作技術の解明と伝承過程の計量的研究

ことばの静と動

河野 武 大妻女子大学 名誉教授



私と人間生活文化研究所とのお付き合いは今年の4月に特別研究員になってから始まったばかりです。そこで、研究所の未来に想いを馳せ、科学に人文科学的な視点が融合されてこそ文化研究が全きものになるはずだと信じ、以下のエッセイではあえて次元の異なることばの世界に招待したいと思います。なお、言語学には音声学(調音・音響・聴覚)、神経言語学、計算言語学など純粋科学に含まれる分野もありますが、ここではそこには立ち入りません。

ヒトはことばを持つことによって類人猿と袂を分かちました。ことばの発生が世界を区切り・分類し・再構成する認知機能のためであったのか、それとも人と人との繋がりを目指したコミュニケーションのためであったかは見方の分かれるところです。おそらくは両方が同時に目標にされていたとみる他ないでしょう。ことばが表象する世界は人を取り巻く外界、身体、そして感覚や感情などの心的領域から成ります。世界は茫漠としており、流転しています。人はその景色を追う中でしだいに事物の輪郭を意識するようになります。おそらくはこれを契機としてことばが生まれます。ことばは世界をそのまま鏡に映しているのではなく、認知の濾過を経て一大伽藍に組み立てられます。

区切られた対象は品詞によって大まかに分類され、さらに細かに下位分類されます。例えば、名詞は事物が「個」か「連続体」かに応じて可算・不可算に分けられ、「個」はさらに単数・複数にカテゴリー化されます。また、動詞は行為・状態が他者の働きかけを受けるか否かに応じて他動・自動が区別され、さらには行為・状態が動的か静的(状態的)かに分けられます。このように、品詞は認知カテゴリーの入り組んだネットワークの上に成り立っている

す。そして、最終的に、品詞をパーツにして世界の事態(つまり出来事や状態)を文の形で再構築します。文は複数の事態を取り込むことができ、基本的な文の形は節に変形され、主節と従属節が階層化して表示されます。以上、ことばの記号システムとしてのスタティックな構造体を素描しました。

それでは、ことばはどのようにダイナミックに働くのでしょうか。以下、際立った行動をいくつか拾ってみましょう。

◇〈結びつけ〉

話し手と聞き手は似かよった世界に住む反面それぞれ独自の世界に接しており、そのため事物の認識に差が生まれます。リンゴとナシ、ギターとバイオリンは混同される心配はありませんが、それぞれにまつわる百科事典的知識やイメージは大きな隔たりがあります。それを踏まえた上で、話し手は発話の際今話題にしたい事物を取り出して相手に差し出さうと、再度それに言及する際には指示内容を共有知識として結びつけます。この区別を担うのが主に冠詞です。非共有知識(=未知情報)は不定冠詞(単数可算名詞の場合)およびゼロ冠詞(複数可算名詞・不可算名詞の場合)によって、共有知識(=既知情報)は定冠詞で表示されます。冠詞は結びつけによる話し手と聞き手の情報の共有化を果たします。情報のやり取りで足並みを揃えるのです。

◇〈切りつめ〉

情報伝達には無駄があっても効率的とは言えません。話し手と聞き手の間で了解されている事柄は一定の条件下で情報の切りつめがなされます。部分的な切りつめは代名詞のような代用形で、完全な切りつめは省略形で表されます。The cat that we

love等の関係代名詞も元をたどれば反復的なthe catの代用に過ぎません。またこのthatは省略することのできるのです。日本語の関係詞節は「私達が愛する猫」となり関係代名詞は現れませんが、これも「私達が猫を愛する」が関係詞節として後続の「猫」を修飾しているとみれば節内の反復的な「猫(を)」は省略形であることが分かります。関係代名詞の存在は日英語の大きな違いのように感じられるかもしれませんが、実は代用が省略かといった切りつめの度合いの違いに過ぎません。代用を好むか省略を好むかは、ことばの世界に留まらず、様々な形象となって深く文化に浸透していることは周知の通りです。

◇ 〈並べ〉

二つの時間を並べて、一方が他方より先行するか同時かといった相対的な時間関係を見る認識様式があります。過去や現在のある時点を基準時とし、事態が起こった・起こっている時間を出来事時としてその順序を問います。出来事時が基準時に先行すれば完了相となり、同時であれば進行相となります。過去完了の文It had cleared up by noon yesterday.では基準時は過去のnoon yesterday、出来事時は晴れ上がった時間です。現在完了の文It's cleared up now.では基準時は現在(発話時)のnow、出来事時は先の例と同様に晴れ上がった時間です。出来事の結果が今の状態に影を落としています。You must have been exhausted yesterday.では、You were exhausted yesterday.という事態があったはずだと今推量しています。Haveは時間差を表しているだけなので、yesterdayを直接指しているわけではありません。なお、日本語の「た」・「ている」の時間表現には別の認知様式が関わりますので、英語の対応形の習得にはいきおい時間がかかります。

◇ 〈重ね〉・〈ずらし〉

人はある事物を他の事物に見立てたり、密接に結びついた事物に光を当てたりする認識傾向があります。つまりはメタファーとメトニミーです。まったくかけ離れた物の間に類似性を見つけ出して重ね合わせるのがメタファーです。最も身近な身体部位は様々な事物の見立ての源泉として語の多義性を氾濫させます。喩えはほとんど無尽蔵とも言え、例えば「テニス界の新星・女王」もそのような特性をもつ

た物、もどきを喚起します。このようにしてことばにイメージの豊穡を醸し出します。一方のメトニミーは、指示対象を中心から周辺にずらして捉えます。例えば、「一人頭」(per head; per capita)は「一人」(per person)のずらしですが、「頭」という部分が「人物」という全体を表示しています。また、「ホワイトハウス」という建物ないしは場所が「アメリカ政府」という機関のずらしになったりもします。もう一例、店の「開店」・「閉店」の英語の掲示を挙げておきましょう。よく目にするのはYes, we are open.とSorry, we are closed.です。注意すべきは、it (this shop; our shop) isではなくwe areとなっているところです。店をそのまま言うのではなく、店の経営者やスタッフを前面に出しています。このようなずらし表現には客への親しみの眼差しが感じられます。こうして見ると、メタファーもメトニミーも複眼的な物の見方です。ことばはレトリックという贅沢にして華麗な技を開花させているのです。



人間生活文化研究所での新しい研究について

中川 正宣 東京工業大学 名誉教授

私は、2016年3月に東京工業大学を退職した後、同年4月以来、人間生活文化研究所の特別研究員として在籍させていただいています。東京工業大学の大学院では、心理学、特に認知科学の方面で、人間の心の数学的理論モデルやその実証実験など、主に基礎研究に従事していました。自分自身の大学、大学院生時代、その後の北海道大学や、東京工業大学での教員としての研究はほとんど基礎研究が中心で、教育を含め応用研究には全く縁のない研究生活を続けてきました。ところが現在、かつて指導した学生諸君のうち何人かが、すでに、教育分野で研究者として活躍されており、当研究所に在籍すると同時に、その方々のお手伝いということで、急に教育分野の応用研究に従事することになってしまいました。このことは自分でも、少々不思議なめぐりあわせと感じています。最近、少々鈍ってきた頭を鍛えなおすには、いい機会を与えられたと思っています。当研究所では所長の大澤先生を中心として下田先生ら、発育発達研究やフィールド研究等、実社会での応用研究に優れた専門家が多く活躍されており、無意識のうちにその良い影響を受けられていることには、ひそかに感謝しております。

今従事しています教育研究の一つは、東京大学の植阪友理さんを代表者とする科学研究費のプロジェクトで、教師の実態把握力の計量的評価方法の開発を目指す研究です。植阪さんは、もともと東京工業大学大学院の私の研究室に学振の博士研究員として在籍されていました。その折、植阪さんから、多肢選択問題に関する学生の実際の選択頻度分布や得点分布と先生が推定した分布のずれを表す指標を構成したいという要望を受けました。この指標がうまく構成できれば、先生の実態把握力を計量的、客観的に評価できるというようなお話でした。

この問題の場合、学生の実際の選択頻度分布や得点分布と、先生の推定した分布の、いわゆる分布間の比較ですから、KL情報量を用いるのが最も常識的で普通の方法です。しかし、KL情報量を用いていろいろやってみても、どうもうまく先生と実態との差を表し切れないことがわかってきました。そこで、当時の指導教員として、植阪さんに学生の実態分布と先生の推定分布の関係を表す、ある簡単な数理モデルを提案しました。このモデルでは先生の実態把握力を示すパラメータを一つだけ含んでいます。このパラメータの値が1のとき、先生の推定した分布は本来の学生の実態分布と完全に一致していることになります。一方、このパラメータの値が1より外れるときは、それだけ先生の推定が実態とかけ離れていることになります。このパラメータの最も重要な性質は、その値が1より大きいときと、1より小さいときとで、おなじ外れるにしても、その先生の推定分布の外れ方が、全く異なるということです。この違いを説明するために、学生の実態分布と先生の推定分布を同じ座標の上で図に表しますと、図1、2のようになります。

パラメータが1より大きいときは図1のように、先生の推定分布（濃線）は学生の実態分布（薄線）より、大きい部分がさらに大きくなり、小さい部分はさらに小さくなっているのがわかると思います。逆にパラメータが1より小さいときは、図2のように、先生の推定分布（濃線）は学生の実態分布（薄線）より、大きい部分は逆に小さくなり、小さい部分は大きくなっています。ところが、興味深いことに、このような、図1と図2が表している、分布の差の違いは、実はKL情報量では表現できません。図1と図2の分布の差は多くの場合、KL情報量では同じ値になってしまいます。しかし、植阪さんの教

Comparison1

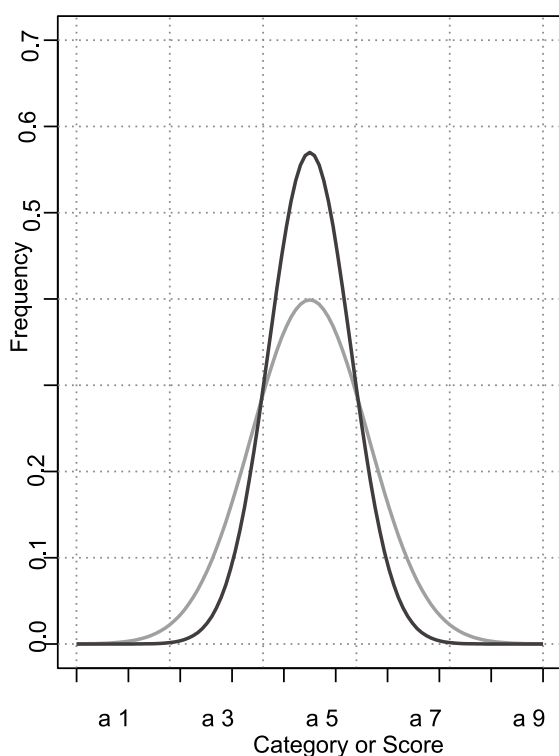


図1

パラメータが1より大きいときの学生の実態分布（薄線）と先生の推定分布（濃線）の比較

Comparison2

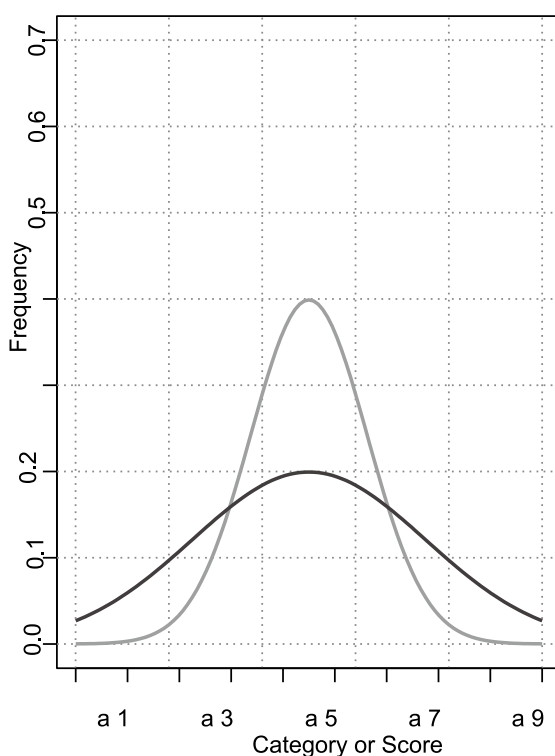


図2

パラメータが1より小さいときの学生の実態分布（薄線）と先生の推定分布（濃線）の比較

育現場での経験に基づけば、図1に現れるような推定のずれがある先生と、図2のような推定のずれがある先生とでは、その実態把握の仕方がかなり違っているようです。当該研究のパラメータでは表現できるこの違いは、前述のとおりKL情報量には反映しません。さらに、元の実態分布がどのような分布であっても、先生の推定した分布のパラメータが1より大きい場合と1より小さい場合でKL情報量が全く同じ値になって区別できないことは、数学的に正確に証明することができます。

これらの理論的裏づけに基づき、植阪さんのチームは教育現場での調査を重ねて、先生や問題ごとのパラメータの違いや、学校全体としてのパラメータの違いを測定し、その研究をさらに実践的に発展させています。また、このチームは、データを入力するだけで、このパラメータを計算表示できるウェブ上のシステムを開発し、広く現場の先生方にも利用可能な場を提供しています。この研究は既に、日本テスト学会やEARLI2017等、国内外の学会で発表されています。

私が参加しているもう一つの教育研究は、ベネッセ教育総合研究所の張寓杰さんとの、自動作問に関する共同研究です。この研究も既に今年の日本認知科学会で発表されています。張さんはもともと東京工業大学大学院の私の研究室に所属し、工学博士号を取得されました。その後、東邦大学理学部の博士研究員を経て、現在はベネッセ教育総合研究所の研究員として活躍されています。

この研究はもともと張さんが博士論文の研究として実施された、言語統計解析に基づく帰納的推論の計算モデルの構成に関連しています。この研究では、モデルで用いる確率的な意味構造の作成のために、大規模な言語データから、何万もの動詞と名詞の共起頻度を計測しました。

この共起頻度を利用して、動詞と名詞の正しい組み合わせと間違った組み合わせを含む組み合わせ課題を自動的に作成するシステムを構築することが、この共同研究の目的です。英単語の意味に関する自動作問領域ではすでに多くの研究が発表されていますが、日本語に関する自動作問の研究はまだそれほど

ど多くありません。特に、単語の意味は他の単語との組み合わせによって大きく変わってしまうことが多く、この変化は、名詞と動詞の組み合わせにおいて顕著です。たとえば「走る」という極めて基本的な意味の動詞でも、「車が走る」という表現の場合と「緊張が走る」という表現の場合では、その意味が異なっています。一方、「緊迫が走る」という表現は、字面は似ていても適切な表現とは言えません。これらの点を考慮すると、同じ「走る」という動詞がどんな名詞と組み合わせると適切な表現になるのか、という組み合わせの問題が極めて重要であると言えます。

本研究での「語彙組み合わせ問題」としては、例えば「緊張が広がる」のような名詞と動詞の組み合わせ句が日本語として適切かどうかを答える問題形式を用いています。新聞や文学作品等で一般的に用いられる名詞や動詞は各々少なくとも数万語があります。「主語と述語」、「目的語と動詞」の場合では各々その組み合わせパターンは異なっています。単に辞書を参照するだけで、名詞と動詞の適切な組み合わせを組織的に構成し、組み合わせ問題を作成することは極めて困難です。しかも、問題の自動生成では、単なる大量生成ではなく、難易度が異なる問題の生成が求められています。この研究では、上記の問題を解決するため、新聞データ（毎日新聞1991年-2008年）や文学作品を含む大規模言語コーパスから抽出した、三万以上の名詞と七万に及ぶ動詞の組み合わせの共起頻度のデータベースを用いて、名詞と動詞の「語彙組み合わせ問題」を難易度別に自動的に作成できるシステムを構成しました。

さらに、この研究では、自動生成した問題に関して、システムが想定した難易度が、実際の人間の判断と一致するかどうかを検証するため、大学一年生54名を実験参加者としてWeb上で実験調査を実施しました。幸い、今回の実験結果から、自動作問のシステムを用いて生成された「名詞（主語）+が+動詞（述語）」（例えば「緊張が走る」）、「名詞（目的語）+を+動詞」（例えば「局面を打開する」）の二種類の組み合わせ問題について、システムで想定された難易度が実際の人間にとっての難易度と十分一致していることが実証できました。

今後は、いろいろな言語データを加えて共起頻度データを豊富にし、この自動作問の方法を用いて、初期設定で入力する名詞群を様々に変えることで、

課題内容、難易共に多様なテスト項目の自動生成とその実証調査を行う予定です。さらに、将来、本方法を日本語以外、中国語や英語等様々な言語へ適用し、多言語での組み合わせ項目の自動生成システムの構成も試みたいと考えています。

これら二つの、きわめて実践的な教育研究の一端を担えて、自分自身いろいろな意味で、大変勉強にもなったと感謝している次第です。

さらに、今後は、これらの教育研究で培った様々な研究手法を、大澤所長や下田先生はじめ、本研究所のスタッフの皆さんの応用研究に役立てたいと思っております。

人間生活文化研究所特別研究員(2016—)

井上 源喜(2018—現在)	大妻女子大学名誉教授、一般社団法人日本温泉科学会長
温泉、湖沼および河川の環境地球化学的研究	
大貫 敏彦(2016—現在)	東京工業大学科学技術創成研究院先導原子力研究所教授
可食きのこへの放射性核種の濃集挙動に関する研究	
川廷 宗之(2016—現在)	大妻女子大学名誉教授
「福祉教育学」「ソーシャルワーク論」	
河野 武(2017—現在)	大妻女子大学名誉教授
日英語発話のモダリティ・感情表現の語用論	
東明 佐久良(2017—現在)	大妻女子大学名誉教授
地理空間情報技術の調査・研究	
前納 弘武(2016—現在)	大妻女子大学名誉教授
「読む」という行為の変容に関する研究	
中川 正宣(2016—現在)	東京工業大学名誉教授
言語統計解析に基づく計算モデルを用いた日本語と中国語の比較研究	
花村 邦昭(2017—現在)	大妻学院顧問、前大妻学院理事長・学長
「輝く女性」フォーラム	
町田 章一(2018—現在)	大妻女子大学名誉教授
大妻コタカの生涯から学ぶ事項／ダンスセラピーの治療仮説—心身一如の観点から—	
牟田 博光(2016—現在)	ミャンマー連邦共和国教育大臣顧問／前東京工業大学副学長／東京工業大学名誉教授
ミャンマー連邦共和国における臨時教員の大量投入が教育条件と質の改善に及ぼした効果に関する分析研究	